戦国時代の流行歌手高三隆達

隆達とはどんな人物か

丸山　克彦

このところ、高三隆達について調べてみようと思っている。

この人物を調べるには、「小野恭靖著『戦国時代の流行歌―高三隆達の世界』中公新書」は、簡単に入手できる史料としては、現在唯一と言っていいほどの参考書である。以下の文章の多くは、この書を出典としている。文献はそれなりに発刊されているのであるが、近年のそれは少ない。同じ文献をお互いに使い合っているというのが現状で、新発見文書は殆ど無い。

顕本寺説明板より隆達画像

現在、高三隆達について直ぐに「ああ、あの人ね」と解る人はまず、いないのではないだろうか。読み方からして、どのように読むのかが第一の課題になる。

高三隆達＝「たかさぶ　りゅうたつ」と読む。

高三隆達は、大永七年（一五二七）に生まれ、慶長十六年（一六一一）に、八十五才で没したので、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と同時代人と言える。

いわば、彼は戦国時代末期から近世初頭までの時代を生きたと言えよう。

明日をも知れない戦乱の世の中にあって、彼は「隆達節」と言われる流行歌の作者である。彼が節付けして歌い広めた室町小歌の数々は、文禄・慶長年間において関西を中心とした西日本を席巻したと言われている。

しかし隆達の死後、彼の活動を伝える資料はその殆どが失われてしまっており、彼の起こした隆達節がどのような節回しで歌われていたのかさえも、今は判っていない。

ただ、戦国時代が終わりを告げた頃に生きていた人々にとっての隆達節は、近世最初の芸能者として注目され、尊敬される人であった。彼の歌った歌こそが新時代の歌謡。芸能の代名詞であった。そのため死後間もなく彼の実態は失われていたのに、江戸時代を通して有名な人物として伝えられたのである。中公新書小野本

このようなこともあったために、彼の広めた隆達節は、多くの文化人や芸能者

などに影響を与え、その及ぶところの全容を知ろうと思うと、彼や隆達節に関して後世多くの伝説が生み出された結果、俳諧・狂歌・歌舞伎・小歌等の世界に多大の影響を与えていることを知ると、まるで、入れば入るほど全容が解らなくなって「八幡の藪知らず」の状態になってしまう。

戦国期の堺の港は、海外文化の輸入港であった。その影響下にあってここで生まれた、日本を代表する文化は数多くをかぞえることが出来る。

茶道の武野紹鴎、道陳、利休。連歌師の肖柏、宗陳。謡曲に宮尾流開祖の道三、喜多流開祖の七太夫長能と車屋道説。笛の名手恵藤源左衛門。鼓胴の作者、一節道清等である。隆達に関係する小唄の分野では、永禄の頃、松山新介という者がいて、小鼓・尺八・早歌が得意であったと言われている。

高野辰之は、その著『日本歌謡史』の中で、「境港と芸能者」として、次のようにこの時代の堺を説明している。

『隆達の小歌は、全く独創的のものであるか、それとも何か他に之を導いたものがあるか。此の問題は今此の小歌の節が残つて居ないので、解決の見込みはつかない。一流を謳出すとあるから、全く新工夫に成つた曲節と定めてもよいが、記録の上には隆達の先行者と認むべき者がある。境港は当時唯一の貿易港、海外文化の輸入口で、種々の芸道が此処に発達した。茶道の上には紹鴎・道陳・利休、連歌師には肖柏・宗陳、囲碁には意雲・利、玄咄には鼠楼栗新左衛門、謡曲には宮尾流を開いた道三、喜多流を開いた七太夫、笛には恵藤源左衛門、鼓の胴の作者には一節道清、是等は何れも天正文禄時代の名手で、境港が小歌に隆達を出す処の空気を醸成した人々である。』６５９ｐ

さて、この隆達であるが、堺の薬種商高三隆喜の末っ子として生まれ、幼時に日蓮宗顕本寺に入り僧侶としての修行を積んだ。後になって、薬種商を継いだ兄の死により、甥を助けようとして還俗し、後見人として家業を手伝った。

この高三家は「堺会合衆」の一人であると言われている。会合衆と言えば織田信長に逆らって、堺を守ろうとした人々の集団で、ルイス・フロイスも彼らのことを、堺が三十六人の商人達による自治の町であると報告しており、大きな権力と財力を誇った人々である。

その高三家の人間として隆達も、大きな力を持っていたことは当然である。彼はその財力を駆使して、多くの人々と交流し、茶の世界でも武野紹鴎や村田珠光・千利休らと交わり、お互いに影響し合っている。

と言うことは、茶の世界に隆達の小歌が反映されていると言うことでもある。彼は『数寄者に紹鴎、小歌に隆達』と呼ばれていたと言う。堺町人文化の代表で

あったと言うべきか。

彼は隆達節を編み出し、小歌の名人として知られたが、連歌や絵画にも力を入れていた、中でも書は、「堺流（左海流）」と呼ばれて能書であることは有名で、諸人は争って彼の書を入手しようとしたと言われている。

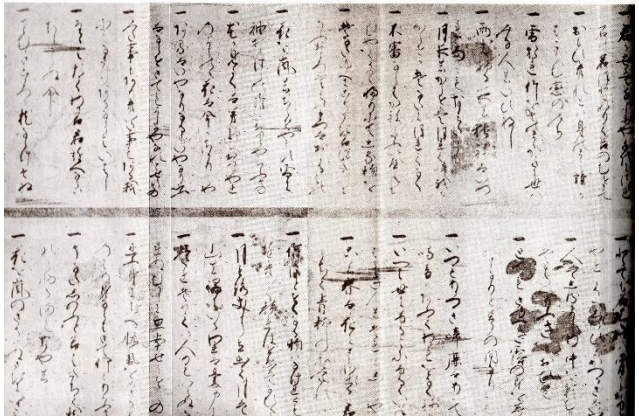
彼の生涯を記録した体系的な内容の文書は残っていない。各所に散在する中から、拾い出してみると次のようなことになる。

『顕本寺過去帳』の内

「隆達」

「自在院隆達　慶長十六辛亥年十一月二十五日
卒　八十五才　当顕本寺に葬る　尤も以前の事
故顕本寺以前の地面　甲斐山之口町故　当時之
顕本寺にてこれ無く候　道隆存生中末子にて
幼少より出家して　顕本寺に住む　尤も道隆存
生中　宗旨帰依　且つ先祖菩提のため　顕本寺
地内に高三坊以下の一坊建立致し　末子隆達を
住持とす　隆達若年の内　兄隆喜坊中に後見す
　是高三坊建立の最初なり　隆達後甥の寺住
坊日根に譲りて　高三これ帰り　一統へ後見す
　小歌の名人　手跡は堺流　太閤様へ召し出さ
れ　御伽す　依って御朱印頂戴　此の御朱印を
以て　高三家より　追々相伺い　二十七石顕
本寺に　御朱印　これ相願い候　発端は隆達なり」

とあり、更にその家系については、宇田川文海氏の講演集が残っている。



隆達書状ボストン美術館所蔵
「日本歌謡史」より

小歌初祖　高三隆達　　宇田川文海講演

『家系

高三家の伝える処によれば、祖先は漢高祖皇帝劉邦の季弟、楚王劉交遊である。其の四十九世の孫　劉清徳の代、則ち支那南宋の淳熙元年、本朝承安四年、始めて来朝帰化して、筑前博多に住居し、その子の劉友徳、通称を高三官という。よって高を姓とし三を名として、高三郎兵衛と称し、薬種商を業とした。これが高家の初代である。九代三郎兵衛道玄の時に至り、堺の津は唐物の輸入多く、交易の繁盛すると言う事を聞いて、北朝の貞治年中、博多より堺に移住し、銭屋町に居を占め薬種と交易を家業とした。その後いつの頃か定かでないが、高三郎兵衛を縮めて、高三と通称に及び、その通称遂に苗字になったという。九代道玄の子は道達、道達の子は道清、道清の子は道隆、道隆の子は隆喜。高三家は代々日蓮

宗顕本寺の檀家であったが、この隆喜は殊の外に信仰が篤く顕本寺の境内の空き地に、一軒の隠宅を設け、これを高三坊と名付け、又自在庵とも呼んだ。晩年長男の隆徳に家を譲り、六石の田地を持ってこの坊に隠居した。隆達は其の末子であったが、若いときから経宗を信じ、傍ら禅学を好み、兼ねて文学に通じ、音楽を嗜み、尤も書道を能くし、商業の道には疎かったので、これにも若隠居をさせ、自分の死後は隆達はこの坊を譲って住居させた。』

また『堺大観』には、

『貞和年中、高三三良兵衛道玄と云ふもの、筑前より此地に移り、薬種交易を営む。道玄は応永七年七月四日死没。其後、道達なるものあり。文明十五年正月六日死没。其頃より当寺の檀越にして、高三三良左衛門、法号隆喜に及んで本寺寺内に隠居し、其所を高三坊と唱へ、文禄の頃、末子隆達出でて薬種を商ふ。手蹟に巧みにして左海流と称し、又一流の小歌節を謡ひ出し、世にナゲ節、或は隆達節と云ふ。太閤秀吉の上聞に達し、曽呂利新左衛門、千利休等と与に大坂城に召され、現米六石の御朱印を賜はりしも、隆達仏信の為に当寺に寄附す。』

と記して、その活躍の時代を示している。

また『堺市史蹟志料』の顕本寺の項目に『高三坊旧記』を載せてその活躍状況を記している。

『文明年間、甲斐町山の口に大顕と号する真言宗の寺あり。住職某上京の途中、尼崎本興寺日隆上人の大知徳なるを聞き、往きて法論して、其徒あり、堺に帰り改宗し、自ら日浄と称し寺を顕本と改めしは文明十三年某月某日なり。此寺の檀家高三三郎兵衛道清は万般の費用を負担す。後世子孫に至るまで有力の檀家たり。道清の孫に三郎兵衛、法号隆喜は天正年中先祖菩提の為、寺内に一坊を建て、高三坊といふ。末弟にして僧となれる隆達を之に居らしむ。是れ隆達節の祖なり。隆達又堺流の筆跡に能きを以て、豊公に召さる。其縁故により、朱印地二十七石を顕本寺に付し、内五石五斗高三坊に頒たる。其後故あって生家に復帰したるも、高三坊には代々高三家有縁の僧を居らしめしが、慶長二十年大坂夏の陣の兵燹に罹りて焼失し、尋いで坊は本寺と同じく現今の地に移りたり。』

『高三家系図』

『貞和年中頃、高三三良兵衛道玄、筑前より当地に移り、銭屋町居住、但銭屋町は今の両替町也。薬種交易渡世、御居候処、応永二十七年七月四日死。法号道玄と申候。併往古の事共故、委細相分り兼候。元和弐年、宿院寺町地替の砌、土中に石碑相埋有し。其後いつの頃や、井中より文明十五年正月六日法号道達と彫刻有之候。古碑堀出候事顕然たり。夫より連綿顕本寺に墓所御座候。

高三三郎左衛門、法号隆喜と申者、甲斐山口顕本寺寺内に隠居仕候。右隠居処高

三坊と相唱へ、末子劉達と申者、住持に仕。右隆達手跡は左海流全盛有之候。並になげぶしと申候小歌初て謳之。太閤秀吉公達上聞、大坂城在の砌、一芸巧みの門被召。隆達並柱梁新左衛門(そろりしんざえもん)、千の利休等を倶に御前に罷出、相務め相叶御意、現米六石の御朱印被成下置。隆達儀は仏道信仰にて、自ら頂戴の御朱印差上諸寺院同様顕本寺へ被下置候様、御願奉申上候処、御聞届け被成下。尤御朱印二十四石五斗顕本寺より高三坊へ受用仕候。夫より高三七郎右衛門、法号道徳と申者、慶長年中伏見於御城、堺町人三十七人、糸割符頂戴仕候砌、右道徳儀も頂戴仕候儀に御座候。』

『堺市史蹟志料』

『高三家と顕本寺との関係深きこと此の如し。故に墓地内に同家の墓碑甚だ多し。而して独り隆達のもの見当らず。又開山堂なる一木像を隆達なりしと一時伝へたりしも、是れ右の日長の像なること明瞭となれり。唯高三坊の過去帳に左の文あるのみ

慶長十六子十一月二十五日
自在院隆達
当院開山年八十五。』

彼は「自庵」と号した。『堺鑑』は衣笠一閑が記した堺の郷土資料であり、天和三年（一六八三）の成立である。そこに

『高三隆達　元は日蓮宗の僧、当堺の街顕本寺に住す。故あって還俗し、高三氏の家に行き、薬種商を商う。年を経て　小歌の節を歌い　一流となった。世俗の人　隆達節として　謳い賞翫した。』という記事がある。

高三隆達屋敷址は資料に依れば、宿屋町東一丁目三番地にあったとされる。現在その場所は、戦災によって焼失した事もあって、はっきりとは明示できない。堺市史　別編　第七巻　昭和五年六月の記述を手がかりに捜した結果、大筋と呼ばれる道路に面していることがほぼ判明した。

すぐ近くには小西行長屋敷址と標識の立つ場所もあるので、この場所を尋ねることには苦労しない。

資料には還俗後、高三屋敷に住んだとあるので、この付近一帯が堺会合衆の一人であった「高三家」の本家屋敷であった事は間違いが無い。現在は道路の真ん中を阪堺線が通っており、堺市の交通の要衝である。

『高三隆達の屋敷は宿屋町東一丁にあったと推測される。

隆達還俗後定住したのは高三家の屋敷で、その位置は銭屋町にあった。銭屋町は、後両替町と改称し、今の宿屋町字山口筋に当たっている。両替町の高三氏屋敷は、元禄二年堺大絵図には本屋敷、掛屋敷の二箇所を記し、共に清兵衛の名義である。此の両屋敷の現在は、本屋敷は宿屋町東一丁目三番地田中信次郎氏宅、掛屋敷は同丁一番地瓜坂藤四郎氏住宅となっている。隆達の屋敷が、その何れであるかは容易に決しないが、恐らく本屋敷ではなかったろうか。』として、その居住地を比定している。

隆達節

「彼の謡った隆達節」は、「ナゲ節」とも言われた。どのような節回しで謡われたのだろうか。今では全く判らなくなっているが、少しは想像することが出来る。

それは、隆達節が「室町小歌」の系統を引いていると言われているからである。この室町小歌は、狂言や謡曲の中で歌われており、それを元にすると大凡の歌われ方が解ると言うことである。ただし、実際には彼のナゲ節は彼独特の節回しがあったと言われており、初期の内容については想像出来ても、彼の完成期の節回しは判明しない。

信長が、桶狭間合戦に出陣する折りに歌ったと言われる、

『人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を亨け、滅せぬもののあるべきか。』は、あまりにも有名であるが、これも当時流行していた室町小歌節の系統に属するものである。

今ひとつ信長の愛した小歌として伝わっているのが『死のふは一定、しのび草には何をしょぞ、一定かたりをこすよの』がある。これは、幸若舞と呼ばれる歌と一緒に世間に風靡していた曲であった。

隆達節の成立に至るまで

古事記

『饒速日命（にぎはやひのみこと）、天磐船（あめのいはふね）に乗（の）りて、太虚（おほぞら）を翔行（めぐりゆ）きて、是（こ）の郷（くに）を睨（おほ）りて降（あまくだ）りたまふに及至（いた）りて、故（かれ）、因りて目（なづ）けて、「虚空見（そらみ）つ日本（やまと）の国（くに）」と曰（い）ふ。』

また古事記には、日本武尊がその死に際して謡って大和を偲んだという唄はあまりにも有名で古代を代表する歌謡である。

大和は

国のまほろば
たたなづく
青垣
山籠もれる
大和し美し
命の全けむ人は
畳みごも
平群の山の
隈樫が枝を
烏頭に挿せその子

御神楽の舞

万葉集

紫は灰指すものそ海石榴市の　八十の衢に逢へる児や誰

たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか

万葉集東歌

上毛野安蘇の真麻乇(まそむら)かき抱き寝れど飽かぬをあどか吾がせむ

伊香保ろの傍(そひ)の榛原ねもころに奥をな兼ねそまさかし良かば

伊香保ろの八尺の堰塞(ゐて)に立つ虹の顕(あら)はろまてもさ寝をさ寝てば

赤駒を山野にはがしとりかにて多摩の横山かしゆかやらむ

今様

古今和歌集　新古今和歌集

空也和讃

胡矩羅苦者巴流気騎宝登途淝喜芝可怒都砥馬田夷陀留奴古魯難利間狸

讃阿弥陀仏偈和讃　浄土真宗

弥陀成仏ノコノカタハ　今ニ十劫ヲ経タマヘリ

法身ノ光輪キハモナク　世ノ盲冥ヲ照ラスナリ

智慧ノ光明ハカリナシ　有量ノ諸相コトゴトク

光暁カフラヌモノハナシ　眞実明ニ帰命セヨ

別願讃　一遍

聖道浄土ノ法門ヲ　トリトサトル人ハ皆

生死ノ妄念ツキズシテ　輪廻ノ業トゾナリニケル。

善悪不二ノ道徳ニハ　背キハテタル心ニテ

邪正一如ト思ヒナス　冥ノ知見ゾ恥カシキ。

高野辰之は、その著「日本歌謡史」の中で、古代歌謡から現在の演歌に至る過程を、次のように述べている。

『仏教上より見ての堕落は、外国から移植した声明道の曲節が大いに民衆化したことを告げるもので、内外の声楽は漸くここで融和して、邦楽に取っての新しい時代に入ったものと解すべきである。前の宴曲も亦此の時代の一産物であるが、平曲に至っては宴曲よりも更に早く、更に多く、更に巧に仏教音芸を吸収して、之を物語の上に転用したもので、嬉しくも一世を代表する大文学と音楽とは合して同一体となったのである。

かくの如くして、前代の各種の曲節は、一たび此の平曲に集められ、後の謡曲・幸若舞曲・浄瑠璃等は此の平曲を源泉として流れ出たのである。』３９８ｐ

また更に、平曲の古写本と流布本を比較検討して、特に流布本がその後の歌謡に大きな役割を果たしたという。

『平曲の古写本と流布本を比較してみると、明らかな違いがある。「卒塔婆流」をみると、流布本が甚だしく劇化されていることである。古写本には西国修行の僧侶が厳島の社前で卒塔婆を見いだしたという事で終わっているが、流布本では狩衣姿の宮人らしき者が現れて厳島神社の縁起と利益を語って聞かせる。これは、次代の猿楽能の行き方である。もしその僧が一旦姿を隠し再び現れて「我こそは」と名告れば、純然たる神能である。性佛が日吉の社に参籠して受けた示現というものがある。（中略）叙事詩の平家はかうして次第に戯曲化せられて、遂に能と称する特殊の楽劇が成立したのである。』日本歌謡史４１３ｐ

平家物語という大部の語り物が、一人の人物や、或る年に突然のようにして完成すると言うことは、殆ど考えられない。多くの人々の力によって、時間を掛けて現在我々が手にするような物語が完成したであろう事は、予測できる。

その過程に於いて、それまで伝えられ、歌い継がれてきた歌謡の数々は爰に一旦纏められ、集大成されたのである。高野辰之の指摘する平曲流布本の内容が、大きく変貌を遂げたのも、民衆の中に入って平家を語ろうとすればある程度の受けを狙った改変は仕方が無いことである。この過程で、伝承されてきた多くの音曲の中身も採り入れられたことで有ろうし、趣向を凝らした琵琶法師の語りは人気を呼んだことであろう。

そして今度は、この平曲から新しい流れとなって多くの歌謡を生み出していった。それが戦国時代、高三隆達によって再度この時代の歌の数々が纏められ、そしてここからまた、新しい流れを形作って分かれ、江戸・明治・大正・昭和という時代の歌謡を産んだのである。

瀬戸明神とその関連史跡

大道芸の一種の手品や曲芸のたぐい、あるいはそれを演ずる者のこと。禅家においてすべてを放擲して無我の境に入ることを「放下す」というところから、品玉(しなだま)や輪鼓(りゅうご)をほうり投げて曲取りをする曲芸をもっぱらとする僧形の下級芸能者をさしていうようになり、放下師、放下僧ともいった。

奈良時代に中国から伝来した散楽雑伎から田楽法師を経て、さらに放下僧の手に渡ったという芸統で、室町時代ごろに放下の芸として定着した。

品玉、輪鼓、手鞠、筑子(こきりこ)などを行って大道に立ち、あわせて手妻—手品—や人形回しも演じた。一六六九年（寛文九）京都において豊後屋団右衛門なる者が、「放下物真似(ものまね)」の名代を許されて歌舞伎や人形芝居などに伍した。

小屋掛けを許された放下は、鞠の曲、枕の曲、籠抜けなどを興行した。一方大道芸となった者は「辻放下」ともよばれ、非人階級に扱われて、車善七の差配を受けた。明治以後名称は絶えてしまったが、その芸は寄席芸に入って残っている。伊勢太神楽にも、綾とりの曲、水の曲、手鞠の曲、傘の曲などが「放下芸」として残っている。『織田紘二』

放下師の歌「狂言歌謡・海道下り」

面白の海道下りや
何と語ると尽きせじ
鴨川、白川打ち渡り
思ふ人に粟田口とよ
四宮河原に十禅寺
関山三里を打ち過ぎて
人松本に着くとの
見渡せば、瀬田の長橋
野路、篠原や霞むらん
雨は降らねど守山を打ち過ぎて
小野の宿とよ
摺針峠の細道
今宵は此処に草枕
仮寝の夢をやがて醒井
番場と吹けば袖寒む

筑子(こきりこ)を打って舞う

伊吹颪の激しさに
不破の関守、戸鎖さぬ御代ぞめでた

謡曲　放下僧（ほうかぞう）

四番目物。五流現行曲。作者は宮増ともされるが不明。父を利根信俊に殺された牧野小次郎（ツレ）は、仏門にある兄（シテ）を説得し、旅芸人の放下僧の姿となって敵討に出で立つ。三島明神に参詣にきた利根（ワキ）に、二人は彼の好む禅問答で近づき、すきをうかがってついに敵を討つ。

この能の眼目は、その敵討のストーリーよりも、禅とともに、中世に流行した曲舞、羯鼓、小歌などの芸能づくしにねらいがあり、とくに「面白の花の都や」で始まる小歌は、狂言の『花折』『花盗人』でも歌われるように、当時の流行歌がそのままに取り入れられ、『閑吟集』にも採られている。

ところで、戦国時代のこれらの歌は、どのように歌われたのであろう。

隆達節が流行る直前の永禄年間に、三味線が入ってきたと言われているが、まだ一般的ではない。とすると伴奏に使われるのは、「小鼓」か、一尺一寸一分の長さを持つ竹製縦笛である「一節切」か、あとは扇を手にして調子をとりながら打つ「扇拍子」か。そのような囃子しか考えられない。それらを併せた唄い方であったかも知れない。

そんな中で微かにでは在るが推測できる絵図がある。

この絵図は、中世の盲目の女が、鼓を打って唄っている様子である。

地べたに敷いた莫蓙に座って、道行く人に憐れみを乞い、なにがしかの報酬を期待している盲目の女。隆達の歌はその多くがこのような旅をする芸人によって支えられ、広められて行ったのではないだろうか。

いわば貴賤を問わない民衆の間に、その唄は歌い継がれて行ったのである。彼女たちが唄った室町小歌が、やがて隆達の手で大成し、纏められ、新しい唄い方のリズムを加えられることによって、より多くの人々の共感を得るまでに至ったと言える。

隆達によって体系化された多くの唄は、彼の生存中には武士の宴会などの席で、立って舞いながら歌われたと考えて良い。少なくとも、女性が普及の中心になっていたとは考えられない。お座敷芸では無いので、その後になって門付けや流しで歌われることになっていくのであるが、宴会の中で一人の男が立って舞いながら唄い出すと、その座にいる者達は囃子を適当に入れて、座を盛り上げて行くという唄い方であったのでは無いか。

また一方では、琵琶法師の果たした役目も大きい。
当初、平家を語っていた琵琶法師は、室町・戦国と世間に迎えられていく内に、やがて武士階級の教養の一部として迎えられるようになった法師と、今一方では旅する芸能人として、平曲の流布本と言われる庶民にも理解できる内容を語って、生活をしていた者がいた。しかし、社会の底辺に住んだ琵琶法師は、平家を語るだけでは、やがてそれを迎え入れてくれる庶民がいない、と言う状況になる。生活が成りたたない法師たちは、他の分野への転向をせざるを得ない状況にあった。

その結果、もっと一般受けする世の中に流行っている音曲を採り入れて行く必要に迫られたと言える。そんな時に入ってきた「三線」は、つま弾きによる演奏であったが、常に「撥」を使って演奏を行っていた琵琶法師にとって、三味線を採り入れ、撥による三線の弾奏を行うことは簡単なことであった。

彼等の使っていた琵琶は六弦であったから、それより少ない三弦の三味線は、簡単に受け入れることも出来たのである。

平家琵琶を中心に演奏してきた琵琶法師にとって、この時代になると民衆から次第に飽きられてきて、そんな折に入ってきた「三線」は、撥を使うことに馴れていた法師たちにとっては、渡りに舟の状況では無かっただろうか。室町小歌の多くの部分は、こうして琵琶法師によってまづ広められて行ったと考えられる。

そのような状況を生かして彼等は、三味線を使い、世の中に流行っている音曲をいち早く採り入れて、旅芸人としての活動を開始したのである。

新しいこの楽器は、おおよそ、一六世紀末頃から、多くの人々に受け入れられるようになり、琵琶法師の多くが三味線音楽に転向していった。

当初「呪術」として「散楽」は散所の乞食法師が仙人の装束を真似、小松の枝を手に捧げて様々の祝言を唄っていたが、法師が唱っていたものは、鎌倉時代に入って平家琵琶として引き継がれ、室町時代に入ると能狂言に引き継がれ、三線の流入による弾奏の楽器が三味線として定着すると、そこから小歌や歌舞伎浄瑠璃が産まれるに至った。

室町から戦国にかけては、『説経節』も語られるようになり、「曾我兄弟」や「義経物語」が三味線をバックにして歌われるようになった。

一八世紀に入ると、それまでまだ琵琶を抱えていた法師たちの殆どは、三味線に持ち替えて語りをするようになっていた。

旅芸人の語りは、寛文・元禄頃になると、浄瑠璃・小歌・チャリ・説教祭文語りへと変化し、錫杖を使う歌祭文から、更に「でろれん祭文」浪花節から浪曲へと発展していった。

その後三味線が日本に招来され、その普及によって、隆達節はこれに乗せて歌われるようになった。そのため隆達節の伴奏として使われたことからいっそう彼の創った歌が歌われることになったらしい。彼の作った歌は、近世の開始を告げる流行歌であった。

中世初期の歌謡は、平家物語を語った琵琶法師。その外に猿若師、田楽法師、放下僧、放下師などもおり、女性が主だったのは傀儡女、遊女、白拍子などがいて、小歌という歌を中心にして世間に広めていったようだ。これは永正十五年（一五一八）に成立した『閑吟集』に纏められて現在に伝わっている。

この本には「室町小歌」と呼ばれる歌謡が主に編集されているが、隆達節は、この「室町小歌」を基盤にしていると言われ、『閑吟集』から引用されていると思われる歌が数多く残っている。

隆達は、そのような世の中の流れの中にあって、それまで世間に唱われていた各作品を集め、再編集して新時代に合った歌として体系化していったのである。

『なにせうぞ、くすんで、一期は夢よ、ただ狂へ』や『夢の浮世にただ狂へ』は室町小歌の代表とも言える作品である。

その中から彼によって再発見されたり、閑吟集に書かれるままの内容を、彼の唄い方で歌ってみたり、最初はそのようにして世の中に広まっていったようだ。彼の『泣いても笑うても行くものを、月よ花よと遊べただ』などは、閑吟集の作品と同じ心情である。

閑吟集は、永正十五年（一五一八）に成立した、中世小歌撰集である。一冊の本に纏めるに当たって所収する歌の数を三一一首と限定したために、当時流行していたであろう歌の中で漏れてしまったものもあることが予想される。

しかし、沢山の分類された種類の中から網羅して選ばれたために、一応当時の様子を知ることが出来る内容になっている。隆達がこの閑吟集を参考にしていたことは明白であり、この集から採られた歌を選び出してみると、次のようなリストが出来る。

たゞ何事もかごとも　夢幻や水の泡　笹の葉に置く露の間に　あぢきなの世

や
何せうぞ　くすんで　一期は夢よ　たゞ狂へ
たゞ人は情あれ　槿の花の上なる露の世に
木幡山路に行暮れて　月を伏見の草枕
身は破れ笠よなふ　着もせで　掛けて置かる、
後影を見んとすれば　霧がなふ　朝霧が

これらは全て小歌の部類に属する。隆達はこの閑吟集の中から、多くの作成のヒントも得ていると言える。

隆達節の成立とその影響

世阿弥によって大成された『謡曲』との交流も、見過ごすことは出来ない。室町幕府を構成した、武士や公達の間に大変な隆盛を見た『能楽』から、彼の小歌に継承されたと思われる演目は、じっくりと腰を据えてかかってみれば、多くの例が見いだされるに違いない。

松尾芭蕉も引用したという『あら何ともなや』については、次のような例を見いだすことが出来る。

『船弁慶』弁慶が静に帰るように言った場面の、静の言葉。
『これは思ひもよらぬ仰せかな。何く迄も御供とこそ思ひしに。頼みても頼みすくなきは人の心。あら何ともなや候』
『融』
シテ（老翁）『あら何ともなや。さてここをばいずくと知ろし召されて候ぞ』
『鉢木』
シテ（佐野源左衛門）『あら何ともなや。さように思し召さば。など前には承り候はぬぞ』

ただこの『あら何ともなや』三例の意味は、少しづつ違うようだ。

静の場合は「ああ、なんとしたことでしょう。」であり、融では「これは意外なことを仰る。」であり、源左衛門は「ああ、本当にそうですね」の意になる。

和歌や謡曲に使われた慣用句であろうと思われるが、意味は複雑に変化する。

この慣用句と言うことで言えば、室町小歌や和歌に使われた言葉に『花は紅、柳は緑』がある。

これが謡曲の『山姥』には次のような場面で使われている。

『邪正一如と見るときは、色即是空その侭に、仏法あれば世法あり、煩悩あれば菩提あり、衆生あれば、山姥もあり、柳は緑花は紅の色々』とあり、山姥が真の姿を現して曲舞を舞う場面に唄われている。

『東岸居士』には
シテ『事あたらしき問事かな。聴聞といつぱ。万事は皆目前の境界なれば。柳は緑花は紅。あら面白の景色やな。』
更に『芭蕉』の中で、
地謡『燈を背けて向こふ月のもと。背けて向こふ月のもと。共に憐れむ深き夜の。心を知るも法の人の。教へのままなる心こそ。思ひの家ながら。火宅を出づる道なれや。されば柳は緑。花はくれなゐと知ることも。唯そのままの色香の草木も。成仏の国土ぞ。成仏の国土なるべし。』とある。

この『花は紅、柳は緑』は、元を辿れば蘇東坡の『柳緑花紅眞面目』の禅語より出る言葉であると言われるが、この時代にあっては、そのような出典がどうこう言うこともない。結論を言えば、謡曲や室町小歌・閑吟集などがお互いに影響し合って、その後の隆達節を形成したという事が正しいのではないだろうか。

ここに示すのは、毎日新聞日曜版　平成三〇年八月五日号に掲載された『書の美』島谷弘幸の内容であるが、そこに文禄三年（一五九四）に八八才で死んだ関白九条稙通の書が掲載されており、彼がその前日に書いたと思われる書に中に「柳は緑、花は紅」の語がある。

さきちるも
ちもみるとも
こゝろの色なす
柳はみどり
花は紅
文禄三年正月四日
玖山藤原（花押）

島谷はここで『極当り前であるがままのこと。春の美しい景色の形容でもある。人の手が加わっていない自然の様を詠じて、自らの死期を意識しているかのようである』といっている。九条稙通は関白に叙競られたけれども、経済的困窮から天皇に拝賀することも出来ず辞任し、摂津や播磨方面を金策目的に居住したとされている。
その彼が絶筆の中で、「柳緑花紅」を書いていると言うことは、当時の世相の中でこの語は人口に膾炙された、ありふれた言葉であったと言うことが出来よう。
私は『花は紅、柳は緑』の語について、悟りとは、『当たり前のことが、当たり前に解った』事であるとの、講義を受けた。

蘇軾は北宋最後の皇帝徽宗の頃の人である。
彼が印仏禅師との問答を記した『東坡禅喜集』の中で、『柳緑花紅眞面目』があり、ここではすでに禅語として使われているが、後代に、それが日本に伝えられると別の意味が付け加わって、特に禅宗の世界ではこれは「公案」としてよく使用されていた。

堺の顕本寺にある「劉達碑」には、歌沢の元祖家元笹本金十郎による来歴が記されている。この碑の前には「花紅柳緑」の碑がある。これは隆達節の有名な一節である。『花は紅、柳は緑』は室町時代においては、和歌の慣用句であったようだ。それを彼は、『梅は匂ひ、花は紅、柳は緑、人は心』と歌っている。これは、人間の美的本質を表現しており、人は姿形より、心の深さこそ大事であると言う。この感情は、現代も変わらぬものであろう。
この中での一休禅師の歌は『悟り』の境地を示したと言ってもよいであろう。

なおこの「花は紅、柳は緑」は後述するが、醒睡笑の作者として名高い安楽庵策伝が、この言葉を使った話を載せている。
『京の街で見事な枝垂柳の植木を売り歩く者があった。或男がこの柳を見付けると、何も言わずにいきなり横取りしてしまった。「これは何事。乱暴な」「知らぬか。柳は見取りということがある」「まことにもっともだ」というが早いか、棒でその男の鼻を貼った。血が大変流れた。「何をする」と言って怒ると、「それこそ鼻は紅だ」。』醒睡笑　東洋文庫３１　平凡社
これは一見すると隆達節からの引用とも考えられるが、策伝は室町小歌や閑吟集からの引用しているようである。
また同じ小話が、同じ頃成立したと考えられている笑話集『昨日は今日の物語』にも載っており、当時の世間がよく知っていた例話のようである。そのため、隆達との交流や影響云々は言えないのであろう。
この二つの笑話集については、いろいろな研究結果が出されており、隆達とは別次元の世界に属する人たちによる編集によって成立したとも考えられ、そのために相互の交流が無かったとも言え、この件に関しては、今後の成果を待たねばならないと思う。

上野の国立博物館で「顔真卿」の書の展覧会があり、そこで蘇軾（蘇東坡）と唐の詩人王勃の書を発見する事が出来た。
蘇東坡については「柳緑花紅」の言葉の原典と成っている事が解ってはいた。
また王勃についても　どうやらこの語に関係があるように考えられたので、

その事跡を追っているところであった。それがこの展覧会場で両者の書を実見することが出来た事に対して　何だか不思議な縁を感じて帰った。

その後、最近になって「花柳界」という言葉に着目する事になった。芸者の世界をなぜ花柳界と称するのか不思議になり、調べて見たところこの王勃に至った。

彼は唐時代の詩人であるが、彼の謡った詩の中に「花柳」の語が出てくる。彼の幼少時は神童の誉れ高く、やがて官途につくが、言行が災いして除名処分を受けてしまう。その旅の途中南海を航行する船から落ちて溺死したと言われている。彼は生前白居易と親交を厚くして居り、左遷されてゆく彼との別れに際して、白居易は次のような詩を詠んでいる。

昔在長安安酔花柳　　昔　長安に有りて　花柳に酔う
五侯七貴同杯酒　　五侯　七貴　杯酒を　同じうす
気岸遙凌豪士前　　祈願　遙かに凌ぐ　豪士の前
風流肯落他人後　　風流　あえて落ちんや　他人のあと
夫子紅顔我少年　　夫子は紅顔　我は少年　　（以下略）

これを見る限りにおいて「柳緑花紅」の語は、蘇軾が初めて使用したのでは無く、この語はそれよりもっと早い時代に、人口に膾炙された言葉ではなかったかと思う。

蘇軾は北宋最後の皇帝徽宗の頃の人である。

彼が印仏禅師との問答を記した『東坡禅喜集』の中で、『柳緑花紅眞面目』があり、ここではすでに禅語として使われている。

そうするとこの言葉は、白居易の詩を見る限り、もっと早い時代に『美しい物や人』を表現する言葉として使われていたのではないかと考えてよいと思う。後代に、それが日本に伝えられると別の意味が付け加わって、特に禅宗の世界ではこれは「公案」としてよく使用されていた。

例えば、一休和尚の歌に

見るほどに　みなそのままの　姿かな　柳は緑　花は紅

があり、また沢庵禅師の語には

色即是空　空即是色　柳は緑　花は紅　水の面に　夜な夜な月は通へども
心もとどめず　影も残さず

とある。

この室町小歌を継いだ形の隆達節が、どうしてそのように世間に認められ、広まっていったのかは、当時の歌謡世界を見れば、ある程度納得することが出来る。当時の宴席や祭などで謡われる歌謡は、結構制約があり面倒なものであった。

その制約を打ち破ったのが、隆達であると言えよう。彼の作った小歌の特徴は、宮中儀式で奏されるものや、勅撰和歌集の決めごとなどを取り払い、自由闊達な表現をしたという処にある。

詞型というか、表現の文字数なども、五七五七七の和歌、五七五七七七の仏足石歌などとは違い、『みめがよければ　こゝろもふかし　花に匂ひの　あるもことはり』のような、七七七七とか。今様は七五七五七五七五と四回繰り返すところを、その半切である、『あすをも知らぬ　露の身を　責めて言葉を　うらやかに』のようにと表現した七五七五がある。

作品の例は少ないが、彼が得意とした、『やぶれ菅笠　しめ緒が切れて　更に気もせず　すてもせず』の七七七五。更にもっと短く『あら何ともなの　うき世やの』や、『泣くは我　涙の主はそなたよ』のように表現されるものもあった。

この字数を決まった型にしないという事は、堺町人の自由精神を体した表現の革新性があり、そこに戦国時代の人々の共感を得る心があったと言えるのではないだろうか。

隆達節には「小歌」と「草歌」と言われるものがある。小歌は室町小歌の系統を引くとも考えられるが、実際にはこの系統に所属しない歌もある。一方草歌は「早歌」ともいわれ、「はやうた」と呼ばれた。これは隆達節のテンポが速いと言うことを意味している。また、彼の残した小歌は現在約五〇〇首あると言われているが、その八〇パーセントが恋の歌である。

彼の作る歌は、男女の出会いと別れ、相手の面影を慕う心、そして別れの涙。このような内容の小歌が得意分野であったと言える。だからこの歌は、戦国時代の明日をも知れない自分の命、それを実体験している民衆の心をしっかりと掴んでいたと言えるのではないか。

その歌が信長・秀吉、そして家康、秀忠までの間、爆発的な人気を得て歌われたのである。その一例として、隆達の小歌を記した秀忠の軸も伝えられている。

この後、『人と契らば薄く契りて末遂げよ、紅葉葉を見よ、濃きは散るもの』の歌詞は「浅野藩御舟歌」として歌われ、更に江戸に伝わって江戸端唄、歌沢節として伝えられている。また『花は紅、柳は緑』は浅野藩船歌や河内盆踊りにも採り入れられている。

ここで言う「御舟歌」とは、幕府や藩の新造船の船下しや領主の船出などに歌われた儀礼的な船歌である。（大阪芸大紀要　西岡陽子　祭礼における「御舟歌」）しかし残念なことに、明治維新によって幕藩体制が崩壊すると、このような歌は殆ど滅び去ってしまい現在残るものは無いと言うのが通説のようである。

男女の仲を中心とした彼の歌は、この後広く枝分かれして行き、阿国歌舞伎の踊りの中でも使われた。また、隆達節を変化させて始められたと言われる『弄斎』

などもある。
　これは弄斎という僧侶が歌い始めて、主に京都の遊里で流行り、その後江戸へ伝わった事によって、七七七五の詩形が確立され、その後三味線組歌の地歌・小歌・都々逸から箏歌、御船歌、流行り歌、民謡、更に明治になって詩歌や小説へとその影響は及び、浪曼派や耽美派と呼ばれた作家達に大きく影響したと言われている。

　阿国歌舞伎は三条河原で始めた念仏踊りの中で、隆達の歌に込められた心情を旨く取り込んで謡った。阿国歌舞伎踊りに使われた歌謡の歌詞に、
『世の中の人と契らば薄く契りて末遂げよ、紅葉葉を見よ、濃きは散るもの』
があるが、阿国は劉達の歌の先頭に『世の中の』という語句を入れて謡い踊った。これは隆達節そのままである。中でも阿国歌舞伎でよく上演され歌われたものに『木幡山路に行き暮れて、二人伏見の草枕』があるが、これは隆達節の『木幡山路に行き暮れて、月を伏見の草枕』とほとんど同じ内容である。但しこの歌は前述したように、隆達によって書かれたものでは無く原本は閑吟集である。

　明治になって、流行歌というジャンルが生まれた。現在我々が知る流行歌の殆どは、恋愛を歌い、その結果としての男女の別れを内容としたものがいかに多いことか。何気なく歌ってはいたが、「流行り歌」とか「怨歌」と称する唄も、劉達の影響下にあると言える。吉井勇が作詞した『ゴンドラの歌』は、隆達節の
『恋をせば、さて年寄らざる先に召さりょ、誰か再び花咲かん、恋は若い時のものぢゃの、若い時のものよ』
そのものである。隆達は、日本人の心情を良く理解していたと言うことであろう。

　現在国歌になっている『君が代』は、「詠み人知らず」として古今集にあるが、大して有名な歌ではなかった。これが「閑吟集」に入れられて、更に隆達が自分の節回しで「恋の歌」として広めたため、江戸時代の初めには知らぬ人もないという有名な歌になった。それが、明治になって国歌となる切っ掛けになったとも言われている。但し隆達は「君」を恋する女性にして謡ってはいるが。
　この「君が代」については、前述した浅野藩船歌の『切唄』にも次のように使われている。
『君が代は・千代にや千代を・さゞれ石ゑい・巌となり・てゑい・苔のむすまでも　御代は　めでたのゝゑいそりゃ若　枝もゑいゑいさかゆる・のう　ゑいゑいはもしげる』御船歌集成一三六ページ

　堺文化圏の中で生まれた「わび」については、よく知られるところであるが、

堺の町で確立された茶の湯は、いわゆる「侘び茶」である。それは堺に出た武野紹鴎が、先師村田珠光の教えを発展させて作りあげた芸術であり、遂には「茶道」とまで称される精神世界を持つに至ったものである。この侘び茶を標榜した茶の湯の道を核とする堺文化の精神は、当然のこと隆達にも受け継がれている。隆達が居住した顕本寺は、三好一族やその家臣松山新介と深い関係があり、この寺は「堺幕府」が開かれた場所でもあった。そんなことからも、隆達節には堺の茶の文化が受け継がれているのである。

言い伝えによれば、住吉屋山岡宗無は堺の町衆であるが、隆達の娘を妻にしていた。彼は松永久秀の庶子であると言われているが、茶人として有名であった。彼のことは堺市史に

『隆達の女を妻としてゐた宗無が、隆達の為に一重切を吹いたが、其調が妙で、聞くものの心耳を驚かしたといって笛に合わせて謡った。』中公新書小野本

とある。

堺の茶人である津田宗及の父津田宗達の記した「宗達他会記」の中に、高三隆喜主催の茶会の記録が多く残っている。隆喜は隆達の父であり、隆達は二十二才ぐらいの年齢で父と倶に多くの茶会を経験する機会があったということが想像出来る。一族の高三隆世は信長の茶会にも参加しており、この時は千利休、今井宗久、津田宗及、山上宗二などが参加しており、これら堺の町衆との交流によって茶道を深く知ることになった事であろう。

隆達節と茶道

少し話題がそれるが、その中の一人、武野紹鴎は、「茶の本心」について、正式の茶道では道具一式を台子に飾るが、その豪華さは「花紅葉」に例えられるべきものであると述べている。常日頃から豪華絢爛たる台子を見ている者にとって「侘び茶」の世界は、まさに「裏の苦屋」に例えられる内容である。「花紅葉」の世界を知らない者が最初から侘び茶の世界を体験したところで、その本来の枯淡の世界を知ることは出来ない。花紅葉を知り尽くして初めて、浦の苦屋の世界がわかろうというものである。と述べている。それは彼の表した『南方録』に次のような内容として記されている。

『紹鴎、わび茶の湯の心は、新古今集の中、定家朝臣の歌に

見渡せば花も紅葉もなかりけり
　浦のとまやの秋の夕ぐれ

この歌の心にてこそあれと申されしとなり。花紅葉は則　書院台子の結構に

たとへたり。その花もみじをつくづくとながめ来たりて見れば、無一物の境界、浦のとまやなり。花紅葉を知らぬ人の、初よりとまやにはすまれぬぞ。ながめながめてこそ、とまやのさびすましたる所は見立たれ。これ茶の本心なりといはれしなり。また宗易今一首見いだしたりとて、常に二首を書付、信ぜられしなり。同集、家隆の歌に

花をのみ待つらん人に山ざとの
雪間の草の春を見せばや

これまた相加へて得心すべし。世上の人々そこの山かしこの森の花が、いついつさくべきかと、あけ暮外にもとめて、かの花紅葉も我心にある事をしらず。只目に見ゆる色ばかりを楽むなり。山里は浦のとまやも同前のさびた住居なり。去年一とせの花も紅葉も、ことごとく雪が埋み尽して、なにもなき山里に成て、さびすましたまでは浦のとまや同意なり。さてまたかの無一物の所より、をのづから感をもよほすやうなる所作が、天然とはづれはづれにあるは、うづみ尽したる雪の、春に成て陽気をむかへ、雪間のところどころに、いかにも青やかなる草が、ほつほつと二葉、三葉もへ出たるごとく、力を加へずに眞なる所の道理にとられしなり。』

ここで述べる心は、隆達節の各所に見られるが中でも私は、

『面白の春雨や、花の散らぬほど降れ』と『花紅柳緑』

が、この茶の心に一番近いような気がしている。

隆達節と俳句

俳句について言えば、松尾芭蕉の

『あら何ともなや　昨日は過ぎて河豚汁』

これは芭蕉の、延宝六年刊の『江戸三吟』に収録されている句であるが、初めてこの句に出会ったときから私は、「少し違うなあ」と言う感覚は持っていた。これが芭蕉の句だと思えないのである。どこか違うのである。それが、どうやらこの句は「きのふは過ぎてふくと汁」の部分が先に出来ていて、芭蕉は残りの上句をどうするか暫く思案していたというのだ。そうしているうちに、隆達の『あら何ともなの　うき世ぢゃの』の小歌に出会い、その五文字を入れて完成させたと言うことが、眞実のようである。このように隆達節を入れて句を読むと言うことは、当時よく行われていたと言うことであろう。

宝井其角編集の「続虚栗」春之部には

『古きを慕ふ中に隆達が小歌見出て

独り行く二人も行き候花の山　　文鱗』

の句が見られ、隆達の『独りも行き候、二人も行く、残り留まれと思ふ人も行き

候』の影響を色濃く見ることが出来る。
出典は明らかではないが、「ゆり落とし」と言われた隆達節を『ふしに似せて見む　隆達がゆり落とし』と寛永頃の句もある。そのほかに

雨をふらす　竜たつ節の田植歌　　長重　『俳諧洗濯物』
りう辰の年に小歌やうたひぞめ　　市村　『立志歳旦帳』
隆達が口にまかせし秋の月　　一瓢　『一茶集』

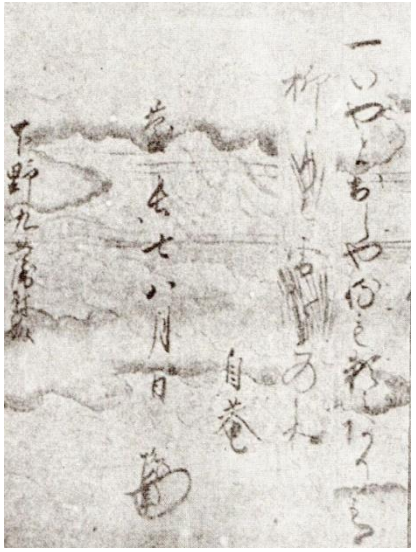
等の例もある。

さて隆達節の数々である

君が代は千代に八千代にさざれ石の、巌となりて苔のむすまで
一夜二夜と　なれそめて　さて諸白髪　諸白髪
花の露ほど　なれそめて　富士の山程　立つ名やの
文の通ひも　無きものを　何の便りに　夢に見ゆるぞ
よしや思はじ　とは思へども　心任せに　ならぬよの
曇らばくもれ　照るとても　君を思ひの　晴るるでもなし
しばし待て　硯の上の　薄氷　うちとけてこそ　文も書かるれ
よしやただ　君こそ我に　つらくとも　浮名は立てじ　身のとがにして
思ふとも　其の色人に　知らすなよ　思はぬ振で　忘るなよ
花に嵐の　吹かば吹け　君の心の　よそへ散らずば
見えなな見えそ　な悶えそ　見れば互に　袖のぬるるに
思ひ思ひて　逢ふも夢　なげくまいよの　別れをも
ねられぬままに　月見れば　袖は露やら　涙やら
いつも心は　通へども　人目忍ぶの　身のうさよ
鑓仕鑓仕は　多けれど　那古野山三は　一の鑓
春は梢に咲くかと待ちし　花を尋ねて山めぐり　歌はさやけき影を尋ねて　月
見る方にと山めぐり　冬は冴えゆく時雨の雲の　雪を誘ひて山めぐり
霞分けつつ　小松引けば　鶯野べに　きく初音
沖の鴎は　梶とる舟よ　足を艪にして
木綿藤吉　米五郎左衛門　かくれ柴田に　のけ佐久間
面白の　お月やな　二人見ればなほ
我が恋は　松に降る時雨　つれなの色や
いとをしさが　募り来て　更にねられぬ

独寝に　泣き候よ　千鳥も
みるめばかりに　波立ちて　鳴門舟かや　あはでこがるる
志賀の浦とて　しほは無いか　顔のゑくぼは　十五夜の月
尺八の　一よぎりこそ　ねもよけれ　君と一夜は　ねも足らぬ
しぐれ候もの　神無月　晴れては曇り　ふり心
相思ふ仲さへ変はる世の慣ひ、ましてや薄き人な頼みそ
あら何ともなの、うき世やの
帰る姿を見んと思へば、霧がの、朝霧が
梅は匂ひ、花は紅　柳は緑、人は心
馬は匂ひよ、木立はいらぬ、人は心よ、姿はいらぬ
帯を遣りたれば、し慣らしの帯とて非難をおしゃる、帯がし慣らしならば、そなたの肌も寝慣らし
面白の春雨や、花の散らぬほど降れ
恋をせば、さて年寄らざる先に召さりょ、誰か再び花咲かん、恋は若い時のものぢゃの、若い時のものよ
添うたより添はぬ契りはなほ深い、添はで添はでと思ふほどに
添うて退く身はある慣ひ、添はで思ふはなほ深い
交わす枕に、涙の置くは、明日の別れを、思はれて
ただ遊べ、帰らぬ道は誰も同じ、柳は緑、花は紅
誰か再び花咲かん、あたた夢の間の露の身に
月よ花よと暮らせただ、ほどはないもの、うき世は
とても消ゆべき露の身を、夢の間なりと、夢の間なりとも
泣いても笑うても行くものを、月よ花よと遊べただ
情けあれただ朝顔の、花の上なる露の身なれば
花よ月よと暮らせただ、ほどはないもの、うき世は
人と契らば薄く契りて末遂げよ、紅葉葉を見よ、濃きは散るもの
人と契らば濃く契れ、薄き紅葉も散るもの
悋気心か枕な投げそ、投げそ枕に咎はよもあらじ
独りも行（逝）き候、二人も行く、残り留まれと思ふ人も行き候
世の中は霰よの、笹の葉の上のさらさらさっと降るよの
雨のふる夜の、独り寝は、いずれ雨とも、なみだとも
逢ふときは秋の夜も早明け易や、独り寝る夜の長の夏の夜
色よき花の匂ひのないは、美し君の情ないよの
交はす枕に涙の置くは、明日の別れを思はれて
この春は花にまさりし君持ちて、青柳の糸乱れ候
竹の丸橋いざ渡らう、瀬でも淵でも落ちばもろとも

かへるすがたを　見むとおもへば　きりがの　朝霧が
身はやれ笠　きもせで　すげなの君や　かけておく
誰かつくりし　恋の道　いかなる人も　ふみ迷ふ
誰か作りし恋の路　いかなる人も踏み迷ふ
心なしとは　それ候よ　冴えた月夜に　黒子袖
夢になりとも　情けはよいが　人のつらさを　きくもいや
うき世は夢よ　消えては要らぬ　解かいなう　解けて解かいの
帰る姿を見んと思へば　霧がの　朝霧が
葛城山の雲の上人を云　雲の上人を
君は高間の峰の白雲　よそににみ見てやみなん
木幡山路に行き暮れて　月を伏見の草枕



隆達印影　下野九兵衛尉殿
「自庵」と署名し花押を記す
『日本歌謡史』高野辰之著
ボストン博物館所蔵

閑吟集から隆達節、その他の歌謡への影響

人買舟は沖を漕ぐとても売らるる身を　ただ静かに漕げよ船頭殿　　閑吟集
いかに船頭　あの舟とこの舟は　同じ港に着かぬかや　舟漕ぎ戻し静かに漕がい船頭殿　　説経節山椒大夫
人買い舟かうらめしや　とても売らるる身じゃ程に　静かに漕ぎやれかんた殿　　徳川実記　小田原陣の歌

後影を　見んとすれば　霧がなう朝霧が　　閑吟集
帰る姿を見んと思へば、霧がの、朝霧が　　隆達節
情けないぞや今朝立つ霧は　帰る姿を見せもせで　　山家鳥虫歌

世間は霰よなう笹の葉の上のさらさらさっと降るよなう　　閑吟集
拾はば消えなんと見ゆる玉笹の上の霰　　源氏物語柏木の巻
世の中は霰よの、笹の葉の上のさらさらさっと降るよの　　隆達節
見山おろしの子笹の霰の　さらりさらさらとしたる心こそよけれ　松の葉

身はやりたし　詮かたな通ふ心の　物を言へかし文はやりたし　詮かたな　　閑吟集
通ふ心の　物を言へかし　　閑吟集
身はやりたし　詮かたな　通ふ心の　物を言へかがな　　隆達節

梅は匂ひよ　花は紅　人は心　　閑吟集
梅は匂ひよ木立はいらぬ　人は心よ姿はいらぬ　　隆達節草歌
梅は匂ひよ　花は紅　柳は緑　人は心　　隆達節小歌
梅は匂ひよ桜は花よ　人は育ちで振りゃいらぬ　　奈良県民謡

一夜二夜とも言はばこそな　よしせめて　朝顔の花の露の間なりと　　閑吟集
一夜二夜とも言はばこそ　せめて朝顔の花の露の間なりと　　隆達節

幾度も摘め　生田の若菜　君も千代を積むべし
初春を言祝ぐ唄であるが、隆達節では同曲「春」として伝わる

さて何とせうぞ　一目見し面影は　身を離れぬ　　閑吟集
夢に見えつつうつつに馴れつ　あ笑止と去らぬ面影や

いたづらものや　面影は　身に添ひながら独り寝　　隆達節小歌

独りお寝るか独りお寝るか　いや二人寝るもの影　閑吟集

見ずは　ただ　よからう　見たりやこそ　物を思へ　ただ　隆達節小歌

葛城山に咲く花候よあれをよと　よそに思うた念ばかり　閑吟集

よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峰の白雲　新古今集

君は高間の峰の白雲　よそにのみ見てややみなん　隆達節

花は折りたし梢は高し　眺め暮らすや木のもとに　山家鳥虫歌

我をなかなか　放せ山雀　とても和御料の　胡桃でもな　閑吟集

身は山雀　放せよ我を　松の実ばかりで胡桃でもなし　隆達節早歌

散らであれかし桜花散れかし口と花心　閑吟集

千歳ふるとも散らざる花と心の変わ　隆達節

一夜来べばとて　咎もなき枕を　縦な投げに　横な投げに　なよな枕よ　なよな枕　閑吟集

恪気心か枕な投げそ　投げそ枕に咎はよもあらじ　隆達小歌

君が来ぬにて枕な投げそ　投げそ枕に咎もなや　吉原はやり小歌

わが恋を人知るらめや敷妙の枕のみこそ知らば知るらめ　古今集

来る来る来るとは　枕こそ知れ　なう枕　物言はうには勝事の枕　閑吟集

枕こそ知れわが恋は　涙かからぬ夜半もなし　隆達節草歌

身のほどの　なきに慕ふもよしなやな　あはれ一村雨の　はらはらと降れかし　閑吟集

雨が降れがなはらはらと　独り板屋の淋しさに　隆達節草歌

よそ契らぬ　契らぬさへに名の立つ　閑吟集

よそ契らぬ　契らぬさへに名の立つに　隆達節草歌

契らぬとても名の立つに　独りお寝るか　およるか　隆達節小歌

契らぬとても名の立つに　独りお寝るか独りおよるか　二人寝るもの影とても

に　　女歌舞伎踊歌

憎い振りかな　あの振りをする人は　むず折れがする　　閑吟集
つれなの振りや　すげなの顔や　あのやうな人がはたと落つる　　隆達節小歌

神ぞ知るらん我が仲は　千代万代と契り候　　宗安小歌集
神ぞ知りける我が仲を　千代万代と祈り候　　隆達節草歌

うらみつくれば　恨みない仲も恨みらるる　うらみつけしの　うらうらみよの　　宗安小歌集
うらみない中も　恨みつくいれば恨みらるる　うらみつけじと思ふよの　　隆達節草歌

せめてしぐれよかし　独り板屋の淋しさに　　宗安小歌集
雨が降れがなはらはらと　独り板屋の淋しさに　　隆達節草歌

千代も一夜も　帰る朝は憂いものを　　閑吟集・隆達節草歌

詮ない思ひを　志賀の浦波　寄る人に憂かるもの　　宗安小歌集・隆達小歌

身はやりたし　詮かたな　通ふ心の　物を言へかし　　宗安小歌集
身はやりたし　詮かたな　通ふ心の　物を言へがな　　隆達節草歌

訪へば訪ふとて振らるる　訪はば恨みて　振らるる振らるる　　宗安小歌集
訪はねばつらるる　訪はねば恨みて　振らるる　ふらるる　　隆達節小歌

人は兎も言へ角も言へ　立ちしその名が帰るらばや　　宗安小歌集
よし名の立たたば立て　身はある限りあり　いつまでぞ　　閑吟集
立たば立て我が名　君ゆえならば惜しからぬ命　　隆達草歌

雨にさえ訪はれし仲の　月にさへなう　月によなう　　閑吟集
月を踏んでは世の常候よ　風雨の来こそ尽期よの　　宗安小歌集
月を踏んでは世の常候よ　風雨の来こそ尽期なれ　　隆達節草歌

椋の枕に　はらはらほろほろと　別れを慕ふ　涙よの　涙よの　　宗安小歌集
後あさのはらほろはらほろと　かわれを慕ふは涙よの涙よの　　隆達小歌集

はらはらおろと　いづれ誰が涙ぞ村雨　　女歌舞伎踊歌

我が待たぬほどにや　人の来ざるらう
我が待たぬ故にや　人の来ざるらん　　宗安小歌集　隆達節草歌

松に垣穂の八重葎　かかる所にも住まるるか
松の垣穂の八重葎　かかる所にも住まるるか　　宗安小歌集　隆達節草歌

茂れ松山　茂らうにや　木陰で茂れ松山
いつも春立つ門の松　茂れ松山　千代も幾千代若緑　　宗安小歌集　隆達節草歌

思い切りしにまた見えて　肝を煎らする　肝を煎らする
思い切りしにまた見えて　なかなか辛きは人の面影　　宗安小歌集　隆達節草歌

左右ないこそ命よ　情のおりやらうには　いきられうかの
さないこそ命よ　情のおりやらうには　いきられうかの　　宗安小歌集　隆達節草歌

波の立つは風ゆゑの　浮名の立つは君ゆえよの
浦の煙は藻塩焼くに立つ　我が名は君ゆえに　　宗安小歌集　隆達小歌集・草歌

ならぬものゆゑに　なるなるなると言はれともなやの
ならぬものゆゑに　なるなるなるとやるせなや　言へば世にふる　言はねば心がもだもだと　　宗安小歌集　隆達節小歌　松の葉

恨みは数々多けれど　逢うた嬉しさに　はたと忘れる
逢わぬ恨みは積れども　見れば言の葉もなし　　宗安小歌集　隆達節小歌

何閉ざいたる戸やらん　えい　押せども開かぬは切窓の戸
東切窓月うち入りて　添寝の枕恥づかしや　　宗安小歌集　隆達節小歌

鶏は　君戻れとは鳴かねども　君こそ戻れ鶏に咎なや
鐘は初夜鶏は空音を鳴くものを　も往なう　往なうとは　何の恨みぞ　　宗安小歌集　隆達節小歌

待てとはそなたの空情心よ　いや待つまじや　ああ待つまじ
待てとはそなたの空情心よ　いや待つまじや　待つまじ　　宗安小歌集　隆達節小歌

北野の梅も吉野の花も　散りこそしよずる　散りこそしよずる　味気なや
宗安小歌集

北野の梅も吉野の花も散る　君　心あれ
隆達節小歌

誰に馴るると我に知らすな聞けば腹立つた山　顔に紅葉の見ゆるに
宗安小歌集

誰に馴るると我に知らすな聞けば腹立つた山顔に紅葉の散るに
隆達節小歌

繻子の袖細に伊勢編笠は　召す気ぢやとの　お目好きぢやとの
宗安小歌集

繻子の袖細に伊勢編笠が　召す気ぢやとの　お目好きぢやとの
隆達節小歌

泣くは我　涙の主はそなた
泣くは我　涙の主はそなたぞ
宗安小歌集
隆達節草歌

辛き別れをかへりみず　また何時ぞの
辛き別れをかへりみず　また何時よの
宗安小歌集
隆達節草歌

五条わたりを車が通る　誰そと夕顔の花車
五条あたりを車が通る　のほんへ　誰そと夕顔に　さんさ花車
宗安小歌集
閑吟集

天に棲まば比翼の鳥とならん　地に在らば連理の枝ｔｐならん　味気なや
宗安小歌集

比翼連理のかたらひも　心変れば水に降る雪
隆達節小歌

あの真直ぐな竹だにも　雪にもしとと伏すものを伏すものを
宗安小歌集

竹ほど直ぐなる物はなけれども　雪ゆき降れば末は靡くに
隆達節小歌

兎にも角にも笑止なる人じゃ　児手柏の二面
宗安小歌集

思ひの煙が消えつ焦がれつ　あ笑止と建つ名や　立つお名やの
隆達節草歌

目が繁ければまづお待ちあれ　その間に又笑止と立つ名や　笑止と立つ名や
女　歌舞伎踊歌

春の名残は藤款冬（やまぶき）　人の名残は一言
宗安小歌集

春の名残は藤つつじ　人の情は一言
隆達節草歌

何を仰やるも籠で候　散るほどになう　散るほどに
宗安小歌集

何を仰やるも籠で候　心言葉が花になる　散る漏るよの　　隆達節小歌

雨にさへ訪はれし仲の　月にさへなう　月によなう　　閑吟集

月夜にはなり候まじ　闇にさへ　しの　しの　忍ばれぬものを　まして月の　　宗安小歌集

夜には　忍ばれ候まじ　　隆達節小歌

闇にさへならぬ　月にはとても　あら鈍なお人や

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ　　古今集

末の松山波は越すとも　忘れ候まじ忘れ候まじ　　宗安小歌集

末の松山さざ波は越すとも　御身と我とは千代経るまで　　隆達節小歌

さのみ人をも恨むまじ　我が心さへ従はぬうき世なるもの　　宗安小歌集

さのみ人をも恨むまじ　我が心さへ従はぬ身を　　隆達節小歌

そと締めて給ふれなう　手跡の終に顕れるる　　宗安小歌集

そと締めて給ふれなう　手跡の付いて名の立つに　　隆達小歌

何せうぞ　くすんで一期は夢よ　　閑吟集

夢の浮き世をぬめろやれ　遊べや狂へ皆人　　仮名草子

木幡山路に行き暮れて月を伏見の草枕　　閑吟集

木幡山路に行き暮れて　月を伏見の草枕　　隆達節

木幡山路に行き暮れて、二人伏見の草枕　　阿国歌舞伎

小幡山路に我行暮れての　月を眺めの草枕　そもしき恋にはのゑいそりやしな　　新御船歌

身は破れ車　わが悪ければこそ捨てらるれ　思ひ廻せば心憂しやの　　閑吟集

身は破れ笠　きもせで　すげなの君や　掛けておく　　隆達節小歌

人はよいものとにかくに　破れ車よわが悪い　　隆達節

人は悪ない我が身が悪い　破れ車でわが悪い　　山家鳥虫歌

逢ふて立つ名が立つ名かの　無き名立つこそ立つ名なれ　　隆達節小歌

逢ふて立つ名が立つ名のうちか　あはでこがれて立つこそ立つ名なれ　投げ節

逢うて立つ名がナ立つ名の内か　あはでこがれて立つ名こそ　實立つ名のうち　　常磐津

なれや

見ずは恋にはならじものを　あただ恨めし目の厄や　　隆達節小歌

なかなかに見ずは恋にはならじものを　あら恨めしの目の厄
や　竹斎

庭の夏草茂らば茂れ　道あればとて　訪ふ人もな
閑吟集・隆達節草歌夏同文

思ひの種かや　人の情け　閑吟集中最短詩型

思ひ出すとは忘るるか　思ひ出さずや忘れねば　閑吟集
思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじやなに
源氏物語　葵　隆達節草歌にも伝わる
思ひ出すとは忘るる故よ　思ひ出さぬよ忘れぬは　弄斎

思ひ出さぬ間なし　忘れてまどろむ夜もなし　閑吟集
思ひ出す日なし　忘れてまどろむ夜半もなし　隆達節草歌

人の心の秋の初風　告げ顔の　軒端の萩も恨めし
そよめく音に幾度出でて　君待つ時の萩の風　隆達節小歌

二人寝るとも憂かるべし　月斜窓に入る暁寺の鐘　閑吟集
二人寝るとも憂かるべし　草の庵の夜の雨　聞くさへ憂きに
一人寝て　月斜窓に入る暁寺の鐘　隆達節小歌

雨にさへ訪はれし仲の　月にさへなう　月によなう閑吟集
雨の夜にあへ訪はるる我月に訪はぬは心変りかの君は
隆達節小歌

塩屋の煙　塩屋の煙よ　立つ姿までしほがまし　閑吟集
君様は明石の浦の塩屋の煙　心とふりと立つにしおほの候
隆達節小歌

身は鳴門舟かや　阿波で漕がるる　閑吟集
みるめばかりに波立ちて　鳴門舟かやあはでこがるる
隆達節小歌

『閑吟集　宗安小歌集　新潮日本古典集成　北川忠彦　新潮社　平成三十年』

江戸時代以降

このような小歌の影響として、江戸時代に入ると特に七七七五型が流行した。これは「都々逸」と呼ばれる範疇になる。

立てば芍薬、坐れば牡丹、歩く姿は、百合の花
惚れた数から、振られた数を、引けば女房が、残るだけ

長州の高杉晋作の作と伝えられる

三千世界の、鴉を殺し、主と朝寝が、してみたい

などがあり、宴席で良く歌われた。

また『江戸木遣り唄　ちょちょけ節』等でも、この形式で歌われている。

箱根八里の　落葉を屋根に　のせて三島へ戻り籠
咲いた桜に　なぜ駒つなぐ　駒が勇めば　花が散る
君と別れて　松原ゆけば　松の露やら　なみだやら

宮古路豊後掾について

浅草寺本堂を巡ってその裏へ回る。ここはかって奥山と言われた所だ。その片隅に宮古路豊後掾の墓がある。墓は大きく、堂々としたものである。今までここへは何回も来ているのに、少し植え込みの中へ入れば、もう少し前に知る事が出来たのに知らずに見落として来てしまっていた。正面には三行に

元文庚申
還国院本譽自性處士
九月一日

と記し、左側面には

族名　宮古路豊後掾

とある。右側に回るとそこには

延享丙寅九月建之　　孝子　宮古路文字太夫

裏面には、豊後掾の広めた宮古路節が、天下に名だたる音曲として認められた事、それを後世にも伝えようとして師の七回忌を記念してこの墓を造った事が記されている。

またこの左隣には、もう一つの碑が建っている。正面には「二百五十回忌供養」とし、常磐津十六世家元　常磐津文字太夫が造らせた事が、久保田万太郎によっ

て記されている。それにはこの様な事が書かれている。

『この墓碑は、延享三年（一七四六）九月　宮古路豊後掾七回忌追善のため、養嗣子宮古路文字太夫によって、当浅草寺境内に建てられたもの。残存して今日にいたったのだが，このたび、同境内の整理に伴ひ、改修の上、本堂北側に新設された緑地内に、かくは移転、安置されることになったのである。それを機会に、常磐津十六世家元文字太夫は、流祖二百五十年忌の法要をいとなみ、併せて流儀発展を祈っての記念演奏会を産経ホールに開催した。一ト言こゝに後代のためにしるす。

昭和三十四年九月　施主に代わりて　　久保田万太郎』

彼は八代将軍吉宗の頃に活躍した人であるが、その人生はまさに波瀾万丈といえる。

宮古路豊後掾は京都の人である。最初、都太夫一中の弟子となったが，師匠を超える人気と名声によって、師やその仲間から圧迫を受け、京都を離れざるを得ない仕儀になった。

落ち着いた先が、将軍吉宗の質素倹約政策に抗して開放政策を執っていた、徳川宗春のいた名古屋城下である。ここでは江戸で禁止されたすべてのものが許され、自由の雰囲気が横溢する全国唯一の場所であった。

たまたま享保十八年、名古屋城下闇の森八幡社で、日置町の畳屋喜八と飴屋町花村屋抱え遊女小さんが心中を図った。幸い二人は助かったが、当時幕府の命令で「心中」という言葉を使うことも禁じられており。将軍吉宗の命令で、「心中は『相対死』と言へ」と言われていたときである。

江戸であれば当然のこと死罪か、生き残った者の内女は吉原遊郭に渡され、男であったら非人に落とされるという決まりになっていた。

しかし宗春の政策は、彼等を数日の晒しにしただけで、のち夫婦としている。

この心中事件は、丁度そのとき名古屋に滞在していた豊後掾が知り、翌年「睦月連理椿（むつまじきれんりのたまつばき）」という外題でこの事件を書き下ろし、黄金薬師の境内、現在は中区錦三丁目の浄土宗円輪寺で上演した。

名古屋闇森八幡神社

円輪寺

円輪寺は名古屋の繁華街、テレビ塔がすぐ近くに望める所にある。大きなビルの間に挟まって窮屈そうにしているが、この辺りは広小路と呼ばれた当時にあっては、名古屋城下町住民の癒しの場所であった。

二人が心中を図った闇の森八幡宮は今も市民に護持されており、近辺住民の寄せる心が判る神社である。然しそこにはこの事件を扱った説明や記録は何もない。名前が示すとおり、当時は昼なお暗い、陽も射さない樹木に覆われた所であったと思われる。

小さな碑が建っている。

その昔　植えにし樹々の年を経て
　　月さえ漏れぬ　くらがり乃森

と読める。当時の様子を彷彿とさせる。

この「睦月連理椿」が黄金薬師に懸かると、爆発的人気が出てさしも広い「小路」が『いやがうえへかさなり　名さへ広き広小路もせま小路になりて　東西の往来も群衆に』と記される状態となった。

彼はこの人気をひっさげて江戸に下り、享保十九年江戸葦屋町河岸でこの心中物を語った。

だいたい心中と言う言葉を使う事自体が禁止されていた江戸において、その心中を扱った出し物を堂々と演出するという事自身、幕府の政策に対する批判・抵抗以外の何者でもない。彼がこの語りを演ずる事が出来たのは、将軍吉宗の命令も、十年を経て聊か緩みを見せていたこともあった。その間隙を縫っての演出である。人気の出ないはずはない。江戸っ子達は、久しくこういった人情の機微に触れる作品に出会う事がなくて、待ち望んでいたのである。

一中節の泣きに「哀愁」と「艶」を加えた彼の節は、江戸にあった加東節・半太夫節などを駆逐してしまう勢いとなり、あっという間に江戸中に広がり、彼のそれは「豊後節浄瑠璃」と呼ばれるようになった。

『河東裃、下記袴、半太羽織に義太股引、豊後かわいや丸裸』

と巷間に唄われたという。

ちなみに、それぞれ河東節、下記節、半太節、義太夫節のことで、江戸三味線音楽の代表であった。すぐに大岡越前守による、豊後節への圧力が加わる。お上の威令が守られず、しかも風儀を乱すと言うわけである。

学者として名高かった太宰春台は、この豊後節流行を苦々しく思っていた。

『都路と意へる浄瑠璃　浪速より来りて悲しき声にて卑しい諺の浅ましく取乱れたる事どもを語り出す程に　江戸の人是にうつりて興じもてはやすこと限りなし　下ざまの人は言ふに及ばず諸侯　貴人　掌の上なるやんごとなき人にもひたすら是を好みて　年の初めにもいかなる目出度き吉事の座敷にても　其の悲しき声にてうれはしき事共を語りいずるを　おかしと聞きていまはしとも思はず日を暮らし夜を明かし』と記して、嘆いている。

庶民の動向を知ろうとしない為政者の考えである。

花嫁姿に「文金高島田」という髪型があるが、これは宮古路風の髪型が原型で

ある。
当時の世相を記したものを読むと、
髪は文金風にして、羽織の紐は先を小さく結び下駄の歯に掛かるようにだらりと下げ、刀は落とし差しにし、懐手で駒下駄を履いてぶらりぶらりと歩く。
武士の中にも家庭の乱れが甚だしく、駆け落ち、不義密通、不倫、姦通などが多発し、吉宗の理想とする質素倹約の享保の改革は何処へ行ったかという有様であった。
元文元年九月には
「宮古路浄瑠璃太夫共芝居興行の儀は苦しからず、自宅において稽古相成らざる旨申し渡され候」と言うことになった。彼はこれを悲観して、京都へ戻ってしまうのであるが、それであの宮古路節が廃れるはずはない。神社や寺の境内、広小路などで乞胸達が語るのは苦しからず。となれば、この禁令が守られようわけがない。
元文五年には、老中から直々に、
「三奉行、大目付、御目付之儀は相互参会之刻も遊興ケ間敷事は有之間敷候得共心を付　浄瑠璃三味線等之音曲は有之間敷候此段申達ニ不及候得共　弥右之趣可被相心得候」
武士階級自らも染まっていたんでは。禁令の徹底するはずはない。
『都路豊後ふし　先達て相止め候ように申し渡し候ところ　その砌は相慎みこれあり候えども　この間は所々宿札に打ち稽古　または往来のやから　みだりに語り　いまだしからざるに相聞こえ　不届きに候　きっと御吟味もこれあるべく候えども　唯この度は名主とも入念あい止め申すべく候　もしこの上　相背く者これ有り候はばきっと申し付くべく候』
ちょっとほとぼりが冷めたかと見られるや、忽ちのうちに江戸の町のあちこちで豊後節が語られることになる。江戸市民のしたたかさを感じる禁令である。
豊後掾が京都へ帰ってしまった後の豊後節は、元文五年彼の死を境にして二つに分かれていく。江戸にいた弟子の文字太夫が、豊後節の家元を継承し、やがて常磐津文字太夫としてこれを発展させていった。
もう一人の弟子であった加賀太夫は、文字太夫とは意見が合わず、別に富士松薩摩と名乗って富士松浄瑠璃を創った。この富士松流はやがて「新内」として発展し現在に至ることになる。

高橋掬太郎は、昭和三六年に『近代歌謡の発展』と題した小論を発表しているが、その中で『爛熟した江戸文化から生まれた近世期の歌謡は、長唄にしろ、義太夫、清元、常磐津、新内、加東などの浄瑠璃物にしろ、端唄、うた沢、小唄、

はやり唄の類にしろ、その殆どが情痴の世界を内容とし、頽廃的な曲調を用い』と否定的な評価をしている。
戦後のこのような伝統芸能に対するどちらかと言えばその価値を否定するような趨勢の中での意見であり、いまとなっては、この考えを受け入れることは到底出来る事ではない。結果として、このような風潮の中で多くのものが失われていったのは、残念としか言いようがない。

ところで、明治になって隆達節は、どのような変化、影響を与えてきたのであろうか。
我が国の「浪漫主義」や「耽美主義」と言われる作家達に与えた例として、多くの作品が挙げられるが、その中でその例を少し取り上げてみよう。
よく知られている作品としては、菊池寛の『藤十郎の恋』がある。彼は隆達節が好きであったと見えて、揮毫にも使ったし、作品の各所にそれを使っているが、この作品の冒頭に使われている。
『幕が開くと、若衆姿の美少年が鼓を打ちながら、五人声を揃えて、左の小唄を隆達節で歌う。
唄「人と契るなら、薄く契りて末遂げよ。もみじ葉を見よ。薄きが散るか、濃きが散るか、濃きがまず散るものでそろ」
（歌い終わると、役者たち拍手をして慰う。下手の障子をあけ、宗清の女中赤紙の付いた文箱を持って出る）藤十郎の恋』
また『忠直卿行状記』では、宴会の席で家臣が隆達節を歌っている。

神坂次郎は、『海の稲妻』で、『辻の人だかりの中で、くぐつ師の女が鼓を打ちながら唄っていた。・・・いくつかの人形を踊らせているのは、夫なのであろう。唄と人形の踊りがおわると、見物人たちのあいだから、ばらばらと銭がとんだ。
派手な小袖に、浅黄色の投げ頭巾のくぐつ師の女が、また低い哀調をおびたふるえ声で、
とても（所詮は）消ゆべき　露の身の　露の間なりと　露の間なりとも
と、唄いはじめたとき・・』と使われている。

富田常雄著『姿三四郎』の中で、良移心当流村井半助と試合をする事になった三四郎は、その試合当日まで心に被さった煩悶から抜け出ることが出来ていない。試合会場の警視庁へ出かける日、一緒に来た「香車の安」から「柳緑花紅」の言葉を聞く。
『「私は松木東庵先生の診察室で「柳緑花紅」といふ額を見ましてね、先生に聞いたら、柳は緑、花は紅だと読むんださうで、なんでぇ、当り前の話しだと思っ

たが、帰り道に、ふと、こりや、いゝ文句だと思ひました、今も、私はその文句を思ひだしてるんですが、凡夫の悲しさだ、悟れねぇ。」

安には安の悩みがあるのであらう。彼は首を振って、顎を両手の上に載せた。

「柳は緑、花は紅・・・・・」

三四郎は口の中で呟いた。

・・・・中略・・・

三四郎は桜田門を入り、宮城の広場に向けて走つて居る。

「柳は緑、花は紅」

もう一度、念仏のやうに唱へた。』

今東光の『お吟さま』では、

『秋の夜更けなど間の御襖を閉めさせたまわず、夜のふけるおもしろさに何時までも御寝遊ばされず、生国の御物語を御せがみなされ、間近に聳える生駒山の山麓にひろがる河内野を、うねうねと蛇のようにうねり曲がって流れる大和川という大河と、それに添うて数えきれぬほどの沼やら池やら、その間に点綴する村々の、とりわけて古の歌垣にもくらべられる夏の踊りのおもしろさ。「その唄を聞かせてたもれ」と御せめ遊ばし、枕にうつぶせになって低い声して

人と契らば　浅くちぎりて　末とげよ　もみじ葉を見よ　濃きがまず散るものに候

と歌ってお聞かせ申しますと、ほとほと御感心遊ばされ「河内者は情け知りよの」と仰せられたのであります。』今東光全集　淡交社

有吉佐和子『出雲阿国』には、多くの隆達節が引用されている。

『添うてもこそ迷へ迷へ　誰にのう　誰になりとも添うて見よ　身は破傘着もせで　すげなの君や　かけて置く　お菊と二人で唄を掛け合って唄い、袖を重ねたり袂を交しながら踊っていると、お国はこれまでにこれほど楽しい事はなかったと・・』

『竹の丸橋いざ渡ろう　瀬でも淵でも落ちば諸共に　橋の下なる女々雑魚だにも　独りは寝じと上り下る』

『もう一曲という御所望があったのかと誤解して、三九郎は鼓を打ち、勘じも唄い出し、まめも必死で太鼓を叩き、女たちは賑やかに口拍子をつけ始めた。世間は霰よのう　笹の葉の上のさらさらさっと降るよのう』

など、引用例は多い。中公文庫

谷崎潤一郎『盲目物語』新潮文庫

『唱歌と申せば、あの隆達節という小唄のはやり出しはたしかそのころでござ

りまして、
さてもそなたは　しもかあられか初ゆきか　しめてぬる夜の　きえぎえとなる
などと申すのや、それからまた、
　りんきごころに　枕な投げそ　なげそまくらに　とがはよもあらじ
と申すうた、もっとおかしな文句のものでは、
　帯をやりたれば　しならしの帯とて　非難をしやる　帯がしならしなら
そなたの肌もしならし（隆達の原文は「寝慣らし」である）などと、よくみなさまにうたってきかせたことがございます。』
　またこの本の奥書に、彼は次のようなことを記している。
『三味線は永禄年中琉球より渡来したること通説なれどもこれを小唄に合わせて弾きたるは寛永頃より始まる由高野辰之博士の日本歌謡史に記載あり尤も天文年中既に遊女の手に弄ばれたること室町殿日記に見え好事家は早くより流行歌に用ひたる趣同じく右歌謡史に委し、此の物語の盲人の如きも好事家の一人たりしか、予がこの技の師匠菊原検校は大阪の人にして今は殆ど廃絶したる古き三味線の組歌を心得られたるが其の中に閑吟集に載せたる「木幡山路に行きくれて月を伏見の草枕」の歌長崎のサンタマリヤの歌其の他珍しき歌詞少なからず予も嘗てこれを聞きたることあり詞は短きやうなれども同じ句を幾度も繰り返して唄ひ且三味線の合ひの手は詞よりも数倍長し曲に依りては殆ど琵琶を聞く如き心地す』と記している。
　この文の中で、隆達節の歌い方が記されており、これは現在となっては貴重な記述と言える。

　すこしジャンルが変わるのであるが、壺井栄の『母のない子と子のない母と』の中に次のような記述がある。
　『山や畑のたくさんある家に生まれた史郎こそ、農学校へいけばよいのにと、手つだいにいくたびに一郎は思うのですが、あるとき、それを話すと、史郎は一分間も考えずに、はねかえすような元気さで、
「ぼくは、海だよ」
　はっきり言ったあとにつづけて、
「一七、八が二度候かよ、枯れ木に花が、咲き候かよ、だ。うちは、代々舟がすきなんだから、しかたがない、だから、ぼくは商船学校だよ。」
「一七、八が二度候かよ」については、一郎も、なんどか聞かされて知っていました。それは昔、瀬戸内海の海辺にそだつ若者が、海はこわいと引きとめられるのをふりきって、一七、八は二度ないと言って、海に出ていくときのことばだということでした。史郎のおじいさんも、史郎のおとうさんも、この「一七，八は二度候かよ」を言って、船乗りになったのだそうです。』

これは、隆達節の
『恋をせば、さて年寄らざる先に召さりょ、誰か再び花咲かん、恋は若い時のものぢゃの、若い時のものよ。』
そのものと言ってよいが、隆達節であると断言することはすこし難しい。
それは、室町小歌にこの歌が採択されているからである。

瀬戸内の「海賊」と呼ばれた、海の男達の間に歌われて、小豆島に伝わったとこの壺井栄の作品にも書かれているこの歌は、なんと中国に住む人々が歌って来たものだと言うのである。
小野恭靖著『室町小歌』七七頁に次のような記述がある。
『室町小歌を書き留めた異色の書物として「全浙兵制考」付録「日本風土記」がある。これは中国明時代の万暦二〇年（日本では文禄元年・１５９２）に成立した書物で、侯継高という名の人物によってまとめられた。そのなかに「山歌」と呼ばれる歌謡が収録されている。それは浙江地方周辺でもちいられていた漢字音によって万葉仮名のように表記された一二首の日本の流行歌謡であった。『山歌』とは、中国で日常生活や労働の際に歌われる民謡や俗謡のような歌謡を意味する言葉である。同書に記録された「山歌」は日本の室町小歌で、当時浙江地方周辺の沿岸で活動した倭寇によって伝えられた歌謡であるとされてきた。しかし、真鍋昌弘は渡来した明の人が日本の九州地方で収録した流行歌謡を書き留めて本国へ送り。それが「日本風土記」として出版されたとする。その「山歌」の中に「一七八は再び候か、枯れ木に花が咲き候かよの」という歌が収録されている。』と記す。
このことを考えてみると、この歌は瀬戸内を支配下に置く「瀬戸内海賊衆」の船歌ではなかったかと思う。それが何時しか倭寇や日明貿易に携わった海人と呼ばれた人々に伝わり、侯継高がそれを書き留めることになったと考えて良い。
倭寇の首魁とされた王直は中国人であったことは、誰もが知る事実であり、東シナ海で活躍した海賊衆にとっては、中国も日本もなかったことは当然で、中国でこの歌が歌われたことを不自然と考える事はない。
それが隆達に至って恋の歌として記述されていることは、時代の変化がもたらしたのではないだろうか。室町・戦国時代の自由闊達な雰囲気がやがて失われて行き、恋の歌になったと言えよう。

白秋などが集まった文学運動に「パンの会」の仲間達がある。但しこれは、龍土会における自然主義文学運動のような位置づけが出来るのかどうかについて

は少し疑問を感じるのであるが、「浪漫主義」や「耽美主義」と言われた文学運動の中に、隆達の心が生きていたのではないかとも思う。

作家の野田宇太郎はその著『日本耽美派の誕生』の中で、隅田川の川岸をセーヌやテムズ川に見立てて集まった人たちによって開かれた、いわゆる「パンの会」と「龍土会」の違いを次のように指摘している。

『龍土会はさうした文壇的にすでに成人した作家の一種の社交サロンであつたが、それに反して新しく興つたパンの会の人々は龍土会の人々に比べて尚十年位若く、文壇には未だほとんど無名の情熱的な詩人、画家たちであつた。かうした情熱的な魅力は、僅かにではあるが、龍土会の常連をして時折はパンの会に加わらしむる結果ともなつたのである。小山内はパンの会の常連であつたし、有明その他自然主義的作家も顔を見せた。』

と記している。

このパンの会の発足当時を回想した、吉井勇の次のような歌がある。

両国の橋のたもとの三階の窓より牧羊神（パン）の躍り出づる日

彼らは隅田川畔のちっちゃなレストランで、白秋の作った「会歌」を唄ってパリーを偲んだ。

パンの会の会歌

空に真赤な雲のいろ
玻璃に真赤な酒のいろ
なんでこの身が悲しかろ
空に真赤な雲のいろ

『邪宗門』

河畔の料亭に集まって、この歌を唄った人々の中には、芥川のように、隆達に通じる作品を書いた作家も多いはずである。

戦国の世を生きた隆達

私の祖先の地は、岐阜県揖斐郡池田町沓井と言うところである。戦国の早い時期に、佐竹氏の傍流としてここに移り住み、土豪としての地位を築いたようだ。

その村に現在も私共一族が祭祀を続けてきた神社がある。これが出来たのは、美濃に斎藤道三が台頭してきた頃のようで、わざわざ小野篁の霊を勧進し来たって、小さな社を建てた。

現在その神社は「花の木神社」と、いうに優しい名前が付けられている。

どうしてそこに、小野篁という、自分たちの祖先でもない人間を祀ってきたのか、疑問に思ったことがあったが、どうやらそれは篁の生涯と関係がありそうなのだ。

彼は、貞和元年（八三四）遣唐副使に任命されるが、部下を率いて乗船するはずであった船に、大使の藤原経嗣が乗ることになって、それではとても部下の命を守ることが出来ないとして乗船を拒否。それによって嵯峨上皇の怒りを買い貞和五年（八三八）隠岐に配流された。その配流される途中に詠んだ歌が有名なである。

『わたの原　八十島かけて　漕ぎ出でぬと　人には告げよ　海人の釣舟』

彼には当時、地獄の閻魔大王の脇にあって助手を務めているという噂があった。

上皇は、一旦は怒りに負けて彼を配流したものの、地獄の役人とあっては、いつ何時自分が篁の怒りによって地獄へ追いやられるか知れたものではない。そんな忖度があったのか、貞和七年（八四〇）僅か二年の配流で帰京が許され以前の官位に復官し、その後更に昇任している。

彼は毎夜、六道珍皇寺にある井戸から地獄へ行き、朝になると嵯峨野の井戸からこの世に戻って来ると言われた。

いわば毎日、「死と蘇生」を繰り返していたのである。これが戦国時代の人々の間に強力な力を持つ神として崇められ、信仰の対象になったと言えよう。

たまたま、岐阜県歴史館に学芸員として勤務していた次兄に問い合わせてみたところ、返ってきた返事は「もし討ち死にしても、生き返るように」との願いからではないかと言うことであった。

この結論は私も理解することが出来る。明日をも知れない、いつ命がなくなっても仕方がないという戦国の世にあっては、出来ることなら「死んでも生き延びたい」という感情になるのは確かなことである。

百年以上に亘った戦国時代という時に生きた人々は、自分の命なんぞは葉の上に宿る露の如き儚い物と映ったであろう。それが高三の謡った

『うき世は夢よ、消えては要らぬ、解かいなう、解けて解かいの』

となり、さらに

『情けあれただ朝顔の、花の上なる露の身なれば』

と言う感情になったのだろうと思う。刹那主義と言われようが明日を頼むことも出来なかった当時の人々の人生観を代表し、彼の歌は深く時代の人々の心に染みこんでいったのである。

この「隆達節」の底を流れる感情や、「侘び茶」の心も、日本人の心情に訴えかける情緒の礎となっている感情は「もののあわれ」である。それが、芭蕉が唱えた、正風俳句にも繋がると言えるのではなかろうか。私は、そのように考えて

いる。

堺に顕本寺を尋ねる

先日堺の顕本寺を尋ねてみた。

堺市宿院町にある寺は、南海堺駅からもそんなに遠いところではない。ぶらぶら歩いて行けば十五分位で着く距離で結構大きな寺地を有しているが、境内の建物などは最近新しくなったような雰囲気である。

門の脇に「堺幕府」の説明がある。

それには、次のような記述がある。

『宝徳三年（一四五一）、大本山本能寺を建立した日隆聖人が堺の地に法華堂を建立し、自らを開基としたのが当寺の始まりです。

創建当初は、開口神社に近い甲斐町山ノ口にあり、七堂伽藍を配置し、中本山として一〇〇有余の末寺がありました。慶長二〇年（一六一五）大阪夏の陣で焼失したのち、現在地に再興されました。その後、昭和二〇年（一九四五）の戦災で全焼しましたが、再び復興されました。

室町時代、天下を狙った三好元長が、細川晴元と共に、阿波から足利義継を奉じ、堺幕府を樹立しました。しかし、晴元は元長と袂を分かち、一向一揆の攻撃を受けた元長は当寺で自害しました。

堺幕府最後の拠点となった当寺の境内には、元長の墓があります。

豊臣・徳川時代に流行した小歌、隆達節の祖、高三隆達の墓と石碑も境内にあります。隆達は高三坊（当寺塔頭）の住職でした。

「おもしろの春雨や　花の散らぬほど降れ」

（隆達小歌）』

とある。

顕本寺本堂

隆達の碑

中でも目立つのは、本堂の前庭に作られた「隆達碑」である。高さは五メートル程もあろうか。「うた沢」の流祖を顕彰する碑のようだ。

隆達自身については、顕本寺過去帳に次のような記述がある。

顕本寺過去帳の内

「隆達」

『自在院隆達」慶長十六辛亥年十一月二十五日卒　八十五才　当顕本寺に葬る尤も以前の事故顕本寺以前の地面　甲斐山之口町故　当時之顕本寺にてこれ無く候　道隆存生中末子にて　幼少より出家して　顕本寺に住む　尤も道隆存生中　宗旨帰依　且つ先祖菩提のため　顕本寺地内に高三坊以下の一坊建立致し末子隆達を住持とす　隆達若年の内　兄隆喜坊中に後見す　是高三坊建立の最初なり　隆達後甥の寺住坊日根に譲りて　高三これ帰り　一統へ後見す　小歌の名人　手跡は堺流　太閤様へ召し出され　御伽す　依って御朱印頂戴　此の御朱印を以て　高三家より　追々相伺い　二十七石顕本寺に　御朱印　これ相願い候　発端は隆達なり』

本堂の前に拡がる墓地の中心あたりに、彼の墓がある。墓は時代を経て相当風化している。同じ墓域に同様に風化した墓もあるので、同じ関係者のものであろうか。

墓にはその正面に『自在院隆達墓』と記してあるが、その他の記述はない。この当時の墓が、何はともあれこうして残っていることは奇跡に近い。

生前に有名になった人物として、その死後も大切に護持されてきた証であろうか。ただ剥落がひどく早晩この墓の文字は消えて無くなることであろう。

隆達の墓

江戸時代中頃から、長唄や浄瑠璃に属さない比較的短い詞を、三味線に合わせて歌われるものが流行っていた。それを「端唄」と呼んでいたが、端唄のさらりと歌うことに飽き足らない人々がそれに工夫を加えて、渋味を加味し節回しも細かくして、重みを出す唄い方が流行ってきた。それを「うた沢」という。この流儀は程なく二派に分かれてその違いを漢字で表記した。一つは寅派で「歌沢」と言い、

英一蝶筆隆達

今ひとつは芝派で「哥沢」と称している。

顕本寺にある「劉達碑」には、この両派の名が刻まれており、自分たちの流祖は隆達であると言う意識があるのだと思う。歌沢の元祖家元笹本金十郎は、「堺隆達の流」と号したと言われている。

この碑の前には「花紅柳緑」の碑がある。これは隆達節の有名な一節である。『花は紅、柳は緑』は室町時代においては、和歌の慣用句であったようだ。それを彼は、『梅は匂ひ、花は紅、柳は緑、人は心』と歌っている。これは、人間の美的本質を表現しており、人は姿形より、心の深さこそ大事であると言う。この感情は、現代も変わらぬものであろう。

ただこの碑、よく見ると「緑柳紅花」と記してある。はて、これはどんな意味を含んでいるのだろうか。蘇東坡の禅語をそのまま記したのであろうか。

花紅柳緑の碑

当初訪れたときには、本堂も庫裏も厳重に鍵が掛けられており、不在であった。いろいろと聞きたいと思って来てはみたが、それは叶わなかった。今度四回目に来てやっと寺の係から話しを聞くことが出来た。

劉達碑の近くに大きな石灯籠がある。側面に字が彫ってあり、明和四年四月二八日と記されている。そこには喜捨を行った者の名前が彫ってあり、その先頭に記されているのは「髙三氏」である。この時代になっても髙三家はこの寺の有力な檀家であったことが判る。

こうして隆達を追ってきたが、その過程で大きな疑問にぶつかることになった。それは隆達と同じような経歴を持ち、しかも同時代に生きた僧侶「安楽庵策伝」である。策伝のことは隆達よりも資料もあり研究が進んでおり、彼の書いた『醒睡笑』によって、彼は現代落語の祖と言われている。

策伝は隆達に遅れること二十七年後の天文二十三年に生まれ、寛永十九年に八十九才で死んだ。隆達とはほぼ同時期に、その盛期を生きたと言ってもよいのではないか。策伝の交友範囲は大変広く、皇族に始まって公卿・文人・高僧・大名などに及び、一流と称してもよい人々が彼の廻りには連なっている。

中でも頻繁に交流した人物は松花堂昭乗・近衛前関白左大臣信尋・小堀遠州・木下長嘯・烏丸大納言光広・松永貞徳等である。また彼が四十一才の折には、堺に住して十年もの間そこで活躍しているのである。それなのに隆達との交流は一向に出てこない。

隆達の作った歌が、信長・秀吉、そして家康、秀忠までの間、爆発的な人気を

得て歌われたと言うことであるならば、策伝の著作『醒睡笑』の中で。何らかの形で触れられるか、採用されて当然と考えるのであるが、これは素人考えであろうか。隆達のような庶民の中に根を張って生きた人とは違い、田舎に育ったが、その後は権門や清家としか交流しようとしなかった策伝は、その後天皇より紫衣を勅許された事による、高僧としての、変な矜持があったのであろうか。

策伝に対する私の疑問である。

いま隆達の事跡を調べる中で、こうではなかったかと思わせる事がある。

それは、隆達節が世の中の底辺と言われる人々によって支えられ、歌い継がれていった事が解るからである。策伝は意図してこのような下世話な芸能に対して、「おのれは違う」という意識を持っていたのではなかろうか。

出雲阿国を初めとして、隆達節を支えたのは、一般庶民以下の旅をする遊芸人で有った。そのような階層の人々に支えられたからこそ、隆達は近代歌謡の祖と呼ばれることになったと言える。

目白女子大学の橋詰静子先生は、北村透谷の研究家であり透谷学会の会長を務めておられた方である。

その橋詰先生が最近出された論考の中に「透谷と『柳は緑　花は紅』」が有り、透谷はこの言葉を西行に学んだのではないかとされている。

誠に示唆に富んだご指摘であり、ここにも、一人、怨歌に繋がる文学者がいたのかと知ったことであった。彼がどこからこの語を引いてきたのかは判らないが、透谷には江戸趣味もあって、この時代の音曲にも関心があったのではないかと考える。それが正鵠を得ているとすれば、隆達が広めた戦国歌謡について、知る機会があったのではないかとは考えられないだろうか。

『柳に透谷』については、西行の「遊行柳」に触発されたとの指摘があり、もし西行の遊行柳が影響しているとしたら、それはまた面白い指摘であり、今後の研究に待ちたい。

また、「花街柳巷」と言う言葉がある。ここで言う花と柳とは「花」は陽の世界、「柳　」は陰の世界を示している。「花柳界」という言葉はここから出てきたようだ。もともと花柳界とは「華やかな世界」を言っていたのではないか。そのような事を考えていくと、この「花紅柳緑」と言う言葉は、既に記述したように多くの人々がこの言葉を使っている事から考えて、現在の時点での私の考えは、この語は日本に入ってきた当時から「常套句」として扱われていたのではなかろうかという結論に至っている。

『いつもお世話になっております』・『雨が降る日は、天気が悪い』『つまらないものですが』と同じ事でありたいした意味を持ってはいないと言うことである。

隆達節はやがて、俳諧・狂歌・歌舞伎・小歌等を経て現在の演歌に至ったと考える事が出来る。それはこれ以後、明治になって新しい文学運動の中で浪漫主義・耽美主義と言われた作家達の作品にこの隆達節の影響が多く語られていることも含めて、その経緯を明らかにすることが、今後の課題のようにも思えるのである。

小野恭靖は、その著『戦国時代の流行歌』中公新書の中で、徒然草の一三七段段について、次のように言っている。

『花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。雨に対ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行衛知らぬも、なほ、あはれに情深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、「障る事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふ習ひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見所なし」などは言ふめる。』

『ここに記されているのは、まさに心の中の世界観に他なりません。絶頂を知る者が、それとは異なるもの、またすでに絶頂を過ぎたものを目の前に見、記憶の中にある絶頂期の残像と比べて感慨を懐くのです。（中略）兼好によって文章化されたこの精神は、目には見えないものを想像の力によって、遠く、深く思いやることを志向した、**日本中世の知識人たちが共有していた思想でしょう。この思想が茶の湯の世界にもたらされ、村田珠光、武野紹鴎、千利休と継承され、発展した末に確立を見た侘び茶の精神の中心に置かれたのです。**

一方で、日本の詩歌の世界でもこの精神は育てられ、遂には熟成されて、隆達節の恋愛観へと展開していきます。「徒然草」では恋愛についても、「男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは、逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ」と断じています。思えば、**ここに描かれた恋愛観は、日本的情念として詩歌の世界で生き続け、隆達節を経由して、遙かに今日の演歌の世界にまで、連綿と続いていると言えます。**』

ここで言う『すでに絶頂を過ぎたものを目の前に見、記憶の中にある絶頂期の

残像と比べて感慨を懐くのです。』は先に記した茶道の美意識の極意として述べられている

『この歌の心にてこそあれと申されしとなり。花紅葉は則　書院台子の結構にたとへたり。その花もみじをつくづくとながめ来たりて見れば、無一物の境界、浦のとまやなり。花紅葉を知らぬ人の、初よりとまやにはすまれぬぞ。ながめながめてこそ、とまやのさびすましたる所は見立たれ。これ茶の本心なりといはれしなり。』と同じ事を言っているのではないか。

そうすると、高三隆達という人間は、戦国時代の美意識を持って生きた人であり、歌い継がれてきたものを纏め、次代に伝えた人であると言える。そのことにおいて彼の存在価値を私たちは認めることが出来るのである。

まとめとして

この隆達節には、恋を歌った歌が多いのですが、この「儚い世」を思うて嘆く内容が多くあります。

だからこそ、いっときの生を十二分に楽しもうではないかと言うことになるので、私のように八十才を越えました者にとりましては、よく解る心情でもあります。

釈尊は、その死に当たって次のような言葉を残しています。これは、誰もがそのように考えているし、多くの先人達が同じような言葉を残してもいます。人が生きると言うことにおける、真理のような気もするのです。

過去は最早　取り返すことが出来ない
未来は　まだやってきてはいない
われわれは　明日の生死も知ることは出来ない
過去や未来を　思い悩んで　何の意味があろうか
ただ　ひたすら　現在に生きよ

（スッタニパータ・スッタンタ釈迦最後の旅　中村　元著より）

僧侶としての生活が長かった隆達が、私共に伝えたかったことは、この釈尊の精神でもあるような気がしています・

また、阿国歌舞伎が三条河原で始めた念仏踊りの内容も、隆達の歌に込められた心情を旨く取り込んだものであったと言えるのではないかと、思っています。

吉井勇の『ゴンドラの歌』が劉達の影響下にあるかどうかは、判断の分かれるところではありますが、戦国期の歌詞が、現在の人々の心を打つと言うことは、それが日本人の心の琴線に触れている、と言うことではないでしょうか。

なおまた、この高三隆達の系統に属する歌として、「カチューシャの唄」「さすらひの唄」「船頭小唄（枯れすすき）」「籠の鳥」「君恋し」「酒は涙か溜息か」。

そして戦後の美空ひばりが唄い、「みだれ髪」に至るまでの数々の「怨歌」や「艶歌」・「演歌」が、それに繋がるものと言えるのではないかと言うのが、現在の時点でのわたしの結論です。

恋をせば、さて年寄らざる先に召さりょ、
誰か再び花咲かん、
恋は若い時のものぢゃの、
若い時のものよ

隆達

「ゴンドラの唄」

吉井　勇

いのち短し　恋せよ少女　７７
朱き唇　褪せぬ間に　７５
熱き血潮の　冷えぬ間に　７５
明日の月日の　ないものを　７５

いのち短し　恋せよ少女　７７
いざ手をとりて　彼の舟に　７５
いざ燃ゆる頬を　君が頬に　７５
ここには誰も　来ぬものを　７５

いのち短し　恋せよ少女　７７
波に漂う　舟の様に　７５
君が柔手を　我が肩に　７５
ここには人目も　無いものを　７５

いのち短し　恋せよ少女　７７
黒髪の色　褪せぬ間に　７５
心のほのお　消えぬ間に　７５
今日はふたたび　来ぬものを　７５

みだれ髪

詞　星野哲郎

曲　船村　徹

唄　美空ひばり

1

髪のみだれに　手をやれば　7 5
赤い蹴出しが　風に舞う　7 5
憎や恋しや　塩屋の岬　7 7
投げて届かぬ　想いの糸が　7 7
胸にからんで　涙をしぼる　7 7

2

捨てたお方の　しあわせを　7 5
祈る女の　性かなし　7 5
辛や重たや　わが恋ながら　7 7
沖の瀬をゆく　底曳き網の　7 7
舟に乗せたい　この片情け　7 7

3

春は二重に　巻いた帯　7 5
三重に巻いても　余る秋　7 5
暗らや　涯なや　塩屋の岬　7 7
見えぬ心を　照らしておくれ　7 7
ひとりぽっちに　しないでおくれ　7 7

斉藤孝著　極上の死生観　ＮＨＫ出版　１２１頁
『源信が美しい浄土を語れば語るほど、その言葉はかえって悲しみとなって返ってくるかのようである。この情念には悲しさと同時に甘さがある。この悲しみと甘さが、私にはセンチメンタリズムの原型であるかに思われる。この感情にもとづいて多くの和讃が作られ、それがまた浄瑠璃にもなり、小唄にもなり、歌謡曲にもなる。源信は、このような日本的情念の原型を作り出したという点においても偉大である。』

参考文献

小野恭靖著　戦国時代の流行歌　高三隆達の世界　中公新書
日本古典文学大系四十四巻　中世近世歌謡集　岩波書店
木村菊太郎著　江戸小唄　演劇出版社
新日本古典文学大系　五六巻　岩波書店　一九九三
安楽庵策伝　関山和夫著　井蛙房出版
醒睡笑―戦国の笑話　鈴木裳三著　平凡社
続日本歌謡集成　巻三　近世編上　東京堂
堺市史料　百五　伝記
顕本寺過去帳
小歌初祖　高三隆達　宇田川文海講演
講演　隆達のまち堺　同志社大学　児玉実用　昭和五十八年三月
「隆達節歌謡」の世界―近世芸能の始祖高三隆達とその歌謡―
フォーラム堺学平成十九年十一月講演　小野恭靖
大阪春秋　特集堺のすべて　第六巻第一号　昭和五十三年二月
泉州文化資料　第六巻第四号　和泉郷土史研究会　昭和三十年一月
堺史料類纂　十六　学芸七人物
堺市史　別編　第七巻　昭和五年六月
室町小歌　戦国人の青春のメロディー　小野恭靖　笠間書院
閑吟集　宗安小歌集　新潮日本古典集成　北川忠彦　新潮社
日本庶民文化史料集成　第五巻歌謡　三一書房　一九七三年
日本古典全書「近世歌謡集」笹野堅校注　朝日新聞社　昭和三一年
近世前期歌謡集　神田俊一　吉田幸一　古典文庫　平成七年七月
非売品「美楊君歌集」
旅芸人のいた風景―遍歴・流浪・渡世―　沖浦和光　文芸春秋新書
瞽女うた　ジェラルド・グローマー　岩波新書
新訂増補　日本歌謡史　高野辰之著　五月書房　昭和五十六年